第三　所がこの諦めるといふことにも程度があるので、餘り早く物事を諦めたならば、すべて物の進歩が止まる譯である。然らば浮世は夢であると見たところで、その夢に對して吾々がどうするかと云ふことに就ては、決して嘲弄してもいけず又諦めてもいけない譯になつて來る、この點に對してポーランドの王子シギスムンドは實に適切な解釋をして居る、或は言換へればクロタルドによつて啓發せられたるシギスムンドは、或はその監督者に啓發せられたるシギスムンドは實に完全なる解釋をして居る。といふのは前にも引いた通り、すべて人生は夢幻であるが、併し同く夢を見るならば、成るたけその夢の間は美く樂くして、所謂寐覺めのわるくならないやうに勉めて行かねばならぬと云ふことになつて居る。夢は何人が作つたかと云へば即ち自分の心から作つたのである。自分の心から作つて行くのであるから、即ち自分の心に於て平素の修養なり何なりが善ければ、その夢に矢張り自分の心に從つたやうなものになる譯である。よく吾々の實驗する所によれば、平生心の奥に潜んであつた邪念が夢の中にあり〳〵と現れて、實に覺めてから悔しく又悲しき思ひをすることがある。して見ると夢の寐覺めのわるいのを防ぐには、邪念をば出來るだけ取除くより外に道はないのである。人生全體の大きな夢も矢張りそんなものと認むることが出來る。尤もこの人生全體の夢の世界の後に何かまだ未來の世界が有るかどうか、それは今こゝで決定することは到底出來ない、又決定する必要もなく、唯その大なる夢の後の世界が有ると無しとを問はず、夢を見て居る瞬間には、出來るだけ其の夢を樂くすると云ふことが必要であらう。所謂それが自己の勢力を發展させたことであつて、たゞ冷淡に過眼することがなく、また屈從して仕舞ふでもなく、出來るだけ自分の腕を振ふといふことになつて行くのである。併しこの夢が結局覺めるかどうかと云ふことは、是れは全然分らない。そこに至つて矢張り覺めた所で、又もう一つ先きに夢があるかも知れないのであるから、覺めてからどうと云ふことは別に考へずに、其の點は諦めて置いて全く一つの夢と看做して、その範圍内で出來るだけの力を振ふと云ふやうになつて行かなければなるまい。

第四　世の中がすべて夢或は自己の作つたものであると云ふことを、尙ほ狹く考へ

て見れば、人々の運命なるものは、畢竟するに自ら作つたものであると云ふことが分かるのである。希臘の運命劇などでは運命の勢力を餘程過大視して居るから、或運命を防がんと欲して、例へば或子を育てれば、其の子が成長の後に親を殺すといふ運命があるから、さう云ふ運命を防がんと思つて、その子供を生れながらにして殺さうとすると、やはり其の子供は何かの緣故によつて蘇生して、親を知らずに成長するが爲めに、後に至つて親と知らずに之れを殺害するやうな塲合になることがある。斯様に希臘では、運命は到底犯し難いものとなつて居るのである。このカルデロンは流石に中世の思想を經て來て居るのであるから、運命の絕對効力といふものは認めて居らない。

自分は前に此の劇を運命劇と名づけたが實は當つて居らぬので、この劇の主意は、運命なるものは矢張り人々の自ら作つたものであると云ふことを結局現はして居る。この王子は生れたまゝ王宮に成長して行つたならば決して惡となるべき傾を有つて居るのではない、況して父王を苦めるやうな人ではないのであるが、なまじ些細なる卜筮を信ずるが爲めに、遂に王子をして劣等な生活を送らせ、次第に墮落し怨恨せしめて、遂に一時は運命の通りになるやうになつて來たのである。つまり運命は初から具はつて居るのでなく、人の意によつて出來たのであるといふことが、是れから表はされて居る。

第五　王子を苦めて王子の性格を一時俄に變更さした者は、根本に就て考へて見ると、これは國王が些細の學問上の智識に誇つて、その獨斷からして人情を無視した結果に外ならぬのである、然るに其の結果はどうであるか、全く自分の自由になる所の世界を窮屈なるものと爲して、遂に好んで運命の中に押込められたことになつたのである。所謂獨斷的の小智識の弊はこゝに現れて居るのである。これを若し吾々の日常誡にしやうとするならば、吾々は斯様に言ふことが出來る、即ち出來るだけ獨斷的の小智識を避けて、飽くまでも眞の智識を追窮する所の研究的態度を取つて行かなければならぬと云ふことである。

第六　この小智識の獨斷は、獨り自己の悲運を招くのみならず、人間社會相互の誤解の本となるのである。即ち國王が王子の擧動を見て矢張り宮廷に置くべき者でない

と云ふやうな風に誤解して行つたのは、全く國王の小智識を弄した結果に外ならぬのである。若しさうでなくして初めから親子の情を以て行つたならば、かくの如き誤解が起るわけはない。又その小智と同く、最も人間社會の誤解を惹起す本は一時の感情である。この王子が山に閉籠もつて王を恨んだのは一時の感情に驅られて居る所が多い。また初宮廷に招かれたときに事毎に不平を洩らして居つたのは、やはり感情に驅られたに過ぎないのである。若し王子が一時の感情或は言換へて見れば激情に驅らるることなく虚心平氣に考へて行つたならば斯の如き誤解は起らなかつたであらう。

要するにこの人間社會の種々の紛紜葛藤は、小智を弄するものと盲目的感情に驅らるゝものとに因るものであらう。尤も是れだけのことは改めて説くこともない極く平凡のことであるが、この劇によつて一端が證明されて居ると見て宜いだらう。であるから畢竟この弊を除くには、眞の人情並に眞の智識といふものを便りにしなければならない譯である。

第七　斯様に歸着する所の智と情とが共に完全になつて居れば、初めて一個人の上から言つても、又個人相互の關係上から言つても、共に圓滿なる發達を遂げることが出來るわけであるが、然らばこの眞の智識、眞の感情を養ふのは何であるかと云ふのに、即ち歸着するところ、意識を明瞭にすることに外ならぬであらうと思ふ。尚ほ他の言葉で言へば自然のまゝの情、自然のまゝの智といふものは、共に好い材料を含んで居るが併し往々屑を混へて居るかも知れないから、此等の點を糺すには反省を施して行かなければならない。即ち自然に傳はつて居る情智を反省によつて開拓し琢磨して、而して初めて秩序整然たる智識感情等に組合ふわけである。之れを或は又眞の理性的境遇といふことが出來る。要するに眞の理性に從つて居る狀態に至つて初めて事に誤りを生じない譯である。

試みに今此の劇に現れて居る人々の特色を擧げて見ると、バシリウス王は小智或は部分的智識を有して、それに誇つて居るのである、併ながら全體的の智識即ち理性的智識といふものを未だ有して居るのでない。それから王子は全く本能に驅られて居る人間である、而もその本能が適當なる傾向を以て發達をしないが爲めに、本能の惡い

方面ばかりが初の内は餘計發達して居つたのである。ロサウラは矢張り本能に富んで居るが、その本能或は感情が稍々全體的性質を帶びて居る、言換へて見れば一時の情に支配されると云ふことなく、飽くまでも自分の思ふ所に向つて發すると云ふやうな形になつて居る。例へば自分を棄てた人を恨む感情などは、王子が世を恨む感情とは餘程趣を異にして居る所がある。一口に言へばロサウラは感情が稍々理性的或は意識的になつて居つて、たゞ盲目的に動いて居るものでないと云ふ形がある。尤も特に人を恨む感情だけが此の内に現れて居るのであつて、其の點の感情が理想的になつて居るといふ譯であるから他までは分らぬ。終りにクロタルドは或程度まで理性を代用して居ると見ることが出來る、或は寧ろ意志といつた方が宜いか、それ故にこのクロタルドによつて夢の意味が王子に傳はつて、王子は遂に大發見をするやうになつたのである。尤もやゝ枯淡冷酷だ。

斯樣にしてこの夢によつて初めて小智的の王に忠告を與へ、並に殊に王子に反省を起さしめて、即ち惡い傾向のみに發達して居つた本能が夢によつて漸次啓導を得て來て、眞の人間的本能に變つて來たのである。夢は本來意識の程度の極く低いものであるが、併し此夢の作用によつて王子の意識が明かになると云ふのは、また趣向の上から言つて、ちよつと面白い點と言はなければならない。之れを以て見ると、吾々は皆全體の統一を得て心の働を最も活潑にさせ、最も整頓させ、一言に言へば意識を明瞭にし理性を發揮するといふ所に於て、稍々此夢としての浮世に處するの最も近い道を得るやうになるのではないか。人生が絕對的に貴いものであると云ふやうに說くのは、自分は今日の所まだ會得出來ない所が多い、或は大夢と見た方がよさゝうだが、兎に角夢といつた所で、其夢に就いて矢張り是れだけの事が考へられはしないであらうか。是が此戲曲によつて學び得た所の敎訓の一端である。（明治三十八年五月）

自由と法則

吾々は生れながら様々の習慣法則等に束縛されて、殆ど一歩も其境界を脱することが出來ないやうな有様に在る。即ち起居動作を始めとして極些細の點に至るまでも多少昔からの習慣が支配して居つて、之に背けば直ちに他人から排斥せられ若くは詰責せられる、其他社會で種々の關係から生活等が複雜になるに從つて益々其法則が嚴重になつて一歩も身動きがならないやうになる事が常である。抑も此法則習慣なるものは、吾々の生れる以前から存在して居るものであるから、本來吾々がそれに對して承認を與へたと云ふ譯ではないので、即ち一向それに服從する義務のないやうにも考へられるが、併し如何せん事實上さういふ法則が吾々を始終束縛して居るのである。是は一々實例を擧げる必要もなく、お互ひに其法則の束縛を受けて或は苦み或は不平を感じて居るやうな事が隨分ある。即ち其法則なるものは吾々から見ると皆歷史の古いものである。換言すれば吾々よりは年長者であると言ふことが出來る。從つて其法則が吾々よりは年長なる者を代表するやうな結果になつて來るのである。平たく言へば、吾々少壯者を社會の經驗を經たる老成者が支配すると云ふ形になつて居るのである。

斯樣に吾々少壯者は法則の下に始終生活して居るのであるが、併ながら元來其法則が少壯者流自身の認可を經たものでないから、時としては其法則の効力が十分に行屆かぬと云ふことが起るのである、即ち其法則に對する反抗が往々少壯者流から起つて來るのである。殊に社會の狀態が一變するとか或は何等か新しい思想が入込み新しい生活が生じて來ると共に、從來の法則の權威が剝奪されて來る、從つて其法則に對する反抗が著しく盛んになつて來るのである。元來其法則は吾々の本性を十分に滿足させて居らなかつたのであつて見れば、忽ちにして其反抗に依て法則が破壞せられると云ふことは怪しむに足らない譯である。即ち是が法則に對する自由の精神の發揮であつて、法則を假に老人と看做すならば自由は即ち青年の思想を抽象的に言現はしたものと言ふことが出來る。それで昔から少壯者流は種々の形に於て當時の法則に抵抗を試みる者がある。或は政治上に於て過去の社會に屬して居る人々の立てた法則に反抗し

て自由主義を皷吹し、現政府顚覆と云ふやうなことを主張する者があつたり、或は古來から成立つて居る宗教上の法則に抵抗する自由思想家が出たり、或は從來の人々を支配して居つた道德律に對して反抗して人間の本能に重きを措て、所謂本能滿足と云ふことを皷吹する者も出來る譯である。人々は往々今日の青年と昔日の青年とを比較して、昔日の青年は氣慨があつたが今日の青年は惰弱に流れて居ると云ふやうなことを言つて居る。即ち昔日の書生は弊衣破袴、天下の事を談じ居る事を主としたが、今日の學生は容姿を整へて男女交際を論じ文學を談じ戀愛を語り若くは實行するやうな風になつて居ると云つて非難をして居るが、併し其兩つの間に實は共通の點があるので、即ち共に此青年者流が法則に對する反抗、即ち自由を主張して居ると云ふ點に於ては一致して居るのである。即ち昔日の書生は政治上の法則に反抗して居つたが、今日の青年は傳說的道德の法則に反抗すると云ふだけの違ひがあるので、共に同じく一種の反抗に屬して居るのであつて、徒らに今日の青年を叱咤してそれで能事終れりとする事は出來ないのである。即ち如何にしても青年に免れ難い反抗の精神が種々の形に現れて來て居るに過ぎないのである。

此青年の自由思想なるものは或人々の眼からは頗る微弱なる勢力のものゝやうに見えて、唯外部の法則を嚴重にして置けば、忽ちにして之を壓伏し去ることが出來るやうに考へて居るのであるが、併しそれは實際上の狀態を顧みない空論である。所謂水の低きに就く勢ひは到底僅かの力で支へる事が出來ないやうな譯で、青年特有なる自由の思想は到底外部から壓伏し去ることは出來ないものであらうと思ふ、外部の法則が割合に効力の無いと云ふことは先達ての東京市中の騷擾で能く證明されて居るものと思ふ。此騷擾は無論全然賞賛すべきものではないが、併し從來或人々の考へて居つたやうに、人民は法律に依て極度まで壓伏する事が出來ると云ふやうな思想に大に反省すべきものであると云ふことを示したものである。それは政治上の問題であつて吾々の今此所に述べやうとする點ではないが、之と同じく青年の思想は到底老人の作つた法則で、いつまでも壓伏し去ることは出來ないのである。今日の青年の間に個人主義だとか自由思想だとか本能主義だとか云ふ聲が非常に高く上るのは少しも怪むに足らず、寧

ろ吾々は當然の事と考へそれを奬勵したいと思ふのである。いつでも社會には舊思想と新思想の兩方が成立つて居つて、社會の大勢から觀察すれば此兩方の思想が成立つて居るので、却て適度の進歩が出來て行くのであるかも知れぬが、兎に角兩方のものがあるとして、新思想が一方に成立つ以上は、其思想を代表すべきものは全力を盡して其方に向はなければならぬのである。一體世の中の事は上を見れば限りなく又下を見れば限りがないので、吾々の眼から見ると往々法則的に思はれるものが又其上の眼から見ると自由過ぎると思はれる事が隨分ある。吾々の思想を他の者は非常に自由過ぎると云ふが、又其下の者から見ると頗る法則的で窮屈であるやうに思はれる事がある。實に其間の階級は多様で中々一言にして盡すことは出來ないやうである。一例を擧げれば例へば此の頃小學校の敎科書になつて居る脩身書の如きものは方今學界の碩儒が集つて評議をして成つた結果であるので、中々法則を説くことが精密嚴重であつて、今日の少壯者流は隨分是等の法則を窮屈であると考へて居る者もあるだらうと思ふ。然るに其脩身書が又一方の眼から見ると餘り自由主義、或は個人主義であるとか云ふやうな風に非難されて居るのである。斯様にいろ〳〵の思想が兎に角社會に成立つて居る次第であるが、青年者流は其資格から言つて決して法則的の側に屬すべきものではないと思ふ。飽く迄も自由なる思想を持ち、社會の實際に依て種々拘泥されて頗る俗氣を含んで居るやうな思想を排斥し、天馬の空を駛る如き即ち稍空想に走るやうな思想でも持つて居て一向差支がない者と考へて居るのである。それを彼此れ束縛し様と云ふのは、是實に法則のみを見て他の方面を顧みないものと言はなければならぬのである。

所が此自由なるものは如何なるものであるか、又本能を滿足させると云ふのはどう云ふ事であるかと云ふことに就ては多少辯明する必要があると思ふ。此點に關しては或人々は多少誤解があると思ふ。全體本能と云ふものは生物學上に用ゐられて居る言葉であつて、生物が無意識的即ち知らず識らずに生存の目的に適ふやうな行を爲すに至る所の其根本の原因を謂ふのである。で生物の生存の目的と云ふのは二つあるので即ち其個體の生命を保存すると云ふ事、茲に其種族の生命を保存すること、此二つである。所が動物にあつては其他にそれに附屬して種々の動作があるが。先づ是は人間

の眼から見ると發達しない動物のして居る事であるから、何れも無意識的の動作の中に籠められるのである、即ち人間の動作のやうに明かに自分が目的を知拔いて居つてする動作ではないのである、譬へば鳥が單に食物を取ると云ふのみならず、巢を營むとか、或は雛を生むばかりではなく雛を養ふとか云ふやうな其動作は悉く本能の中に編入して居るのである。其他又社會を成して居る動物に於ては、譬へば蟻、蜂等の如きものに於ては自ら種々の法則的の關係が成立つて居るのは矢張り本能的動作と看做されて居るのである。斯樣に動物には本能と云ふものは澤山あるが、人類に於ては本能と稱すべきものは極て少いのである。と云ふのは人類は意識即ち心の働きが非常に發達をして居るからして、何事をするのでも一定の目的を定め之に對する方法などを考へてやらない者はない。それであるから自然にフッと湧出ると云ふやうな行爲と云ふものは人類に於ては極めて少いのである。故に假に人類の生存に關する欲は本能と稱し得べきものであるとした所で、其本能なるものは決して動物の本能のやうに露骨に行はれて居るのではない、必ずそれを種々修飾をして一つの立派な風俗とか或は禮儀と云ふやうなものを拵へて來て居るのである、例へば飲食と云ふやうな事が人類に於ては自らそれが一つの社交上の方法になると云ふやうな風にまで發達して居るのである。斯の如く所謂本能と云ふものは人類にあつては決して動物の本能のやうに純粹なものでなく、又個々別々のものとなつて居るのではない、種々の本能的動作が相集つて一つの系統を形成つて居るのである。而して既に系統になつて居る以上は、自ら中心點に近いものと遠いものとの差別があつたり、又第一に滿足させなければならぬものと、暫く抑壓しなければならぬものと云ふ區別が其の所に出來て來る。一つの家を見ても先づ大黒柱が無ければ他の壁だの戸障子等は何等の用も爲すことは出來ない、即ち先づ柱を先に立てなければならぬと云ふやうな事がある、之と同じやうな譯で、人類の本能を滿足させやうと云ふにも自ら緩急輕重の差別が生じて來るのである、即ち人類の生活と云ふことを主として居る、此人類の本能なるものが、自然に一つの順序を立てゝ居らないと、互ひに衝突し遂に其目的たる人類の生存と云ふことを害するやうになつて來るのである。乃ち人類の生存上自ら或る本能は抑壓しなければならぬ。

又或本能は高位に置くべきのであると云ふやうな事柄が自然に出來て來るのである。

斯樣な法則は則ち人類の生活上自然に出來る法則であつて、決して人が定めた法則でも何でもない、猶高いものが引力に依て下に落る、或は酸素と水素と結付くと水が出來ると云ふやうな事と何等の差別もない譯である。斯う云ふ風な法則が自然に出來上つて居るのであるが、それを人間は智力が發達して居るからして認める事が出來る。で人間が既に認める以上は、生存するにはどうしても此法則に從はなければならぬと云ふ事をも悟り、そこで人間の踏行ふべき道と云ふやうなものが出來て來るのである。是が即ち法則である、或は詳しく言へば道德律である。道德律は人々の生活の都合の好いやうに、誰かゞ作つたのであると云ふやうなことを言ふ者があるが、それは誤りであつて、決して何の某が作らうと思つても作れるものでもない、全く自然に發達した結果である。尤も社會の進步に伴つて種々の聖賢が出て、自然にある所の法則を種々完全なる形に改めると云ふことは出來るけれども、併し根本から無いものを製造すると云ふことは出來ないのである。斯樣に本能なるものは知らず識らず一つの法則を形成つて居るのである、去て見ると本能に從ふと云ふことは自ら一つの法則に從ふと云ふことになつて來なければならぬのである。若し單に法則を或先輩が定めたものであると考へて見ると、頗る窮屈なものであるが、自分が定めたものであると云ふやうに考へたならば已むを得ぬ次第であつて、若しそれがいやであるならば、本能を滿足させないより他に仕方がなくなつて來ると思ふ。眞の本能を滿足させるならば、本能を支配しなければならぬと云ふことになるのである。即ち之を一言にすれば、自由と云ふことは法則に從ふと云ふことに外ならぬ次第である。但し其所謂法則は外に偶然ある法則と云ふ譯ではない、自分の心中の法則と云ふ意味である。

　斯樣に自己の本能を滿足させると云ふ中に自ら法則があると言つたならば、或人は之れに反對して言ふであらう、甲乙の本能があつた場合に、甲の方を重んじて、乙の方を輕んずると云ふやうなことはそれは眞の本能主義でない。眞の本能を滿足させるのは、或時には甲に從ひ、或時には乙を重んずると云ふやうに一向そこに制限も何も置かないで唯意の嚮ふ所に從ふのである、酒が飲みたいと云ふ欲が起つたならば直ぐ

酒を飲み、散歩がしたいと云ふ欲が起つたならば直ぐ散歩をすると云ふ様に、其時々の欲に從ふのがそれが眞の本能に從ふと云ふことであると、斯樣に言ふ者があるかも知れない。それはさう云ふ風な生活も無論有り得るのであつて、さう云ふ人も隨分あるのである、併しそれは果して人類に相應したる本能滿足をやつて居るのであるか、即ち言換へて見ればそれは意識的存在物に價する本能滿足と言へるか、是れ大なる疑問であらうと思ふ。尙ほ言葉を換へて言へば、それが眞の自由であると言へるかどうか、寧ろ斯樣なる狀態は其時々の强い外界の誘惑に從つて行くのであるから、本人は全く抵抗が出來ず、唯水のまに〳〵浮んで居る萍のやうになつて居る次第である。一向そこに方針も無ければ目的も何も無いので、即ち其本人は他の大なる壓制を受けて居るのであつて決して自由と稱することは出來ない。是を以て觀ると眞の自由と云ふことは却て法則に從ふ所に自ら存在して居るのである、前に本能の中から自然に法則が出來ると言つたが、即ち式に書くと　自由＝法則　と云ふ式になるが、今度は法則に從ふと云ふことが即ち眞に自由と云ふものを拵へるのであると云ふことを示して居ると思ふ、即ち　法則－自由　である。

斯樣に論じて見ると吾々は自由を重んずると云ふけれども決して全然法則に反對すると云ふのではない、唯法則の中で無意味に定められて居る所の外部の法則に抵抗すると云ふことに過ぎないので、眞の自由の精神に一致し得る所の法則は是は飽くまでも認めなければならぬのである。若し外界に法則があつたならば、其法則が果して自己の認めて居る法則と一致するや否やと云ふことを能く考へて、外界の法則が自己の法則と同一の物となるやうに努めなければならぬ。多くの場合に於ては外界の法則なるものは多年の經驗上から定められて居るものであるから、往々にして自己の認めて居る法則よりは正しいやうな場合があるが、其時には無論外界の法則の方に據て自己の法則を正して行くと云ふことが必要である。外界の法則が外界の法則として權力があるのでなくして、眞の自己の欲を充さしめるものであると云ふ點から價値があるのである。それであるから法則を認めると云ふことは無論あるのであるが、それが決して自由の精神を壓伏すると云ふやうな形になつて現れて來るのではない、詰り吾々の法

則と云ふのも自由と云ふのも、吾々自己の根本から湧出て居るものであると云ふことを考へて見て、眞の自己の修養、人格の鍛錬と云ふことに重きを措かなければならぬことになつて來るのである。それで理想的に言へば自分の欲望の系統を能く秩序正しくして行つたならば何も外から敎訓は要らぬと云ふことになるのであるが、併しそれは稍多くの人には望むべからざる事であつて、斯樣な形に置くと云ふと眞の自由、眞の本能滿足と云ふことが行れずして、却て邪道に踏込むと云ふやうな事が起り易いのであるから、それ故に是非一方には其法則を說明し、多少人々の自由の向ひ方を指導するものが必要になつて來るのである。是即ち普通敎育に修身の講話のある所以であつて、若し此修身の講話を缺たならば眞の法則は知られずして徒らに古い習慣が支配したり、或は眞の自由と云ふことが成立たないで放埒なる生活と云ふものが跋扈するやうになるのであらう、即ち修身講話の效力は消極的たることは免れないが、併し其消極的たるだけの範圍に於ては多少の效力があるものである。

斯の如く修身講話の價値は餘り積極的に現れることは出來ないのであるが、人は往々にして之に要求するのに多大の希望を以てして、遂に或は其希望に副はないと云ふ點から修身の講話を非難するやうな事がある。けれどもそれは誤りであつて、修身の講話は決して宗敎上の說敎の如き大勢力を實行上に持つことは出來ない、唯良い法則を說明すると云ふことが主であるのであるから、之に依て人々の信念を動かして行くと云ふことには至らないのであるが、併し何が一般に認められて居る所の勢力ある法則であるか、と云ふことを示すだけの效能は無論十分あると思ふ。それだけを望めば宜いのであつて、それより以上は感情に訴へなければならぬ部分で、中々學校の講義だけでそれで直ぐ道德の感情が養成される譯のものでないから、是は他にいろ／＼なものから材料を求めなければならぬ、即ち學校課程以外に偉人の傳記其の他高尙なる書物を讀むと云ふやうな事が必要であつたり、或は又學校に於ける修身科以外の學科が悉く何等かの意味で人々の道德心を養成するやうになる事が必要である、單に敎育者の敎へ方のみでなく、又被敎育者の心持次第で以て乾燥無味と認められる學科、例へば數學と云ふやうなものでも、矢張り宇宙の眞理の貴きことを思はせ、一種

の動かすべからざる法則と云ふものがあると云ふことを感ずるやうな氣風を生ぜしめるものであつて、即ち數學の式からも崇高の感情と云ふものを生じ得せしめる事も出來るのである。其他物理、化學、博物と云ひ或は歷史、文學等の教育がそれ〲與つて修養上の力のある次第がある、是等の學科に依て品性修養の基礎を定め、修身の講話に依て其方針を定めたならば即ち法則は自ら內部から整ふやうになつて來て、そこで眞の自由が出來る譯ではないか。所謂人格を養成すると云ふことは、眞の法則に從ふ所の自由なる精神を持つ所の人間を作ると云ふとに外ならぬ、而して教育の要はそこに盡きて居るのである。無論教育家の方から大に盡さなければならぬ點でもあるが、併し被教育者たる學生も此心懸があつて始めて種々の誘惑に抵抗して毅然たる思想を持ち一點の汚點の無い學生生活を送ることが出來る次第である。

以上段々述べた通り青年の思想は飽くまでも自由になければならぬが、其自由が自ら其中に法則を有して居ると云ふやうな有樣でなければならぬ事である。戰後の社會は多少今日の狀態で見る通り思つたよりは景氣のよくないと云ふやうな事になることもあらうが、併し一方には確かに種々の點に於て日本が大飛躍を爲す時機であるから、社會の活動が暫くにして必ず敏活になる譯であると共に、從來の法則が最早朽廢して少しも人を支配することが出來ないやうになつて來ると思ふ。此間に立つて益々其の眞の法則を認める所の自由の精神が無かつたならば非常なる混亂を來す譯であると思ふ。どうせ一時は混亂にならなければならぬ運命であらうけれども、併しながら其中に立つて其混亂を矯正する任に當るべき青年は、先づ其眞の自由を得る道を講じなければならぬだらうと思ふ。而して其道は別に面倒な事もない、前に述べた通り唯人間らしき本能を滿足させ自己の欲望を系統的にし自由と法則とを一致させると云ふことに外ならぬのである。（明治三十八年十一月）

試驗に就て

今日は試驗の事に就て少しく御話をしたいと思ふ。今は丁度學年試驗、若くは入學

試驗等が濟んで、學生が山野に放浪して居る時であるが、此の講話の出版される頃は、學校の授業も始まつて、復びイヤな試驗の期日も近くことになるのである。此の試驗の意味に就て、學生間に誤解がありはしないかと感じて居るからして、少しく自分の考へる所を述べて見たいと思ふ。

一體試驗と云ふものは人々に嫌はれて居る。吾々自分の經驗に訴へて見ても、餘り宜いものではないやうに思はれるが、今日では獨り學生、即ち受驗者が嫌ふのみならず、敎育者の間にも隨分試驗に對して異議を唱へる者が少くない。現に小學校の兒童などに試驗を課するのは、心身の發達を害すると云ふ點から試驗なるものが一般に排せられて居るやうに見える、また女子であるとか、或は最高等の學生などには、一般に試驗が無用であると認められて居るやうである。それで試驗には許多の弊害もあるが、併し又到底試驗を避くべからざる場合が人生、社會の中にあるのである。社會は所謂一の大なる學校である、社會の事業は一大試驗であると云ふやうな議論から言ふのでなく、實際に文字通りに試驗をどうしても避くべからざる場合がある。即ち或高等の學校で入學志願者が募集定員より非常に超過したと云ふ場合には、どうしても撰拔試驗を行はなければならない、從來の素養の分らない人に對する公平無私なる方法は試驗の外にないと言はなければならぬ。その外或職業に人を採用しやうと云ふ場合にも矢張試驗は避くべからざるものである、例へば文官試驗とか、技術家の試驗の如きものである、總て多數の未知の人の中から撰擇する場合には試驗の外に適當な方法は未だ發見されて居らないのである。その外敎育上に於ても自己の知識慾、即ち學問を好む志が十分に發達しない場合には、勢ひ他から刺戟をしなければならぬので、從つて此の場合にも試驗は避くべからざるものと言はなければならぬ。それで試驗の是非善惡は措いて問はず、兎も角今日の有樣では避くべからざる場合があると云ふことは認めざるを得ない。唯試驗が避くべからざる害惡であるか、或は害惡と看做すに足らないものであらうかと云ふ事に付ては餘程研究の餘地があるやうに思ふのである。

試驗に對する人々の反對の理由は種々あらうが、其の重なるものは先つざつと次の如きものであるだらう。

第一に試驗なるものは、無用に人の心身を消費させるものである、即ち一時に許多の事を記憶したいとする爲に、或は過度の勉强を爲して、それが爲に種々の疾病を惹起すとか、或は神經衰弱の如きものに罹るとか云ふやうなことがあつて、虛弱なる身躰を作り、或は精神の健全なる發達を妨害すると云ふやうなのが反對の一理由である。成程是れは實際さう云ふ塲合もある、若し所謂「クランミング」なるもので、平生ちつとも勉强せずに、試驗前に一度にかためて注入するやうなことをやれば、如何なる健康な人でもそれが爲に害せられない事はない。併しそれも一體の方法が間違つて居るのであつて、平生拋擲して置くと云ふのは理窟に合はない話である。若し一時に固めやうと思ふなれば、それに應ずるだけの心身の健康を備へて居らなければならないのである。實際人に依てはさう云ふものもある。兎に角試驗の爲に多少の勞力をすることは免れないが、其の位の勞力を爲し得ないやうな身體の者は、實に將來發達の望みも少いものと言はなければならない、僅かに一年間に學び得た事を復習することが出來ないやうな弱い人間は、寧ろ學問を止めた方が良いのである。やれ神經衰弱であるとか、やれ腦病であるとか云ふやうな事を若い時分から口にして居るのは決して賞すべきことでないと思ふのである。全體今の敎育法は衛生と云ふことを重んじて餘り生徒の樂を謀るやうになつて居る弊がある。昔のやうに亂暴な、野蠻な敎育法は無論取るに足らぬけれども、餘り大事に仕過ぎて、一にも衛生、二にも健康と云ふやうな有樣では、將來の難關に應ずる資格を作ることがむづかしい話である。

第二に、或人は試驗に對して反對して言ふに試驗は學生をして點數を欲しがらせたり、或は席順を爭はせたりして學生を卑屈にするものである、それも小學中學ぐらゐなら可いが、少し高尙な學生には試驗などをする必要はちつともないと言ふのである。成程、若し試驗の爲に種々な陰險な手段を施したり、或は橫着な方法を回らしたり（隨分それはあるかも知れない）さう云ふやうなことをして、自分の實力以上の好い結果を望むやうな僥倖心を起さしては、それは無論よくない事であるが、それは決して試驗の必然の結果ではない。試驗に依て自分の實力に應ずる結果を見たいと思ふ心は決して卑屈ではない。又人間として競爭心を全く無くすることはむづかしいので、自分

は彼の人よりも優つた成績を得たいと思ふのは、必しも卑屈とは言へない。或は惡德であると稱することは出來ない。或はそれをも惡德であると云ふならば、普通の學生に對して君子に對する如き要求をするものと云はなければならない、左樣にするとは必しも教育の適當な方法と云ふことは出來ないのである。寧ろ吾々の考へる所に依ると試驗に依て人の卑屈心を養ふよりは、反て其の卑屈心を滅却することが出來ることになりはしないかと思ふ、其事は次に利益を說く時に述べやうと思ふ。

第三に、或人は反對して言ふに、試驗の爲に學問をする場合には、唯譯も分らずに先生の言つた事、或は教科書に書いてあることを呑込むに過ない、それで其の呑込んだものを其儘直ぐ消化せずに吐出すと云ふのが試驗場の出來事である、殆ど學問をするのは何等の効能も無いものである。斯樣に言つて試驗を輕蔑するのであるが、是れは矢張試驗其物の弊と云ふことは出來ない。唯試驗の方法が過つて居るのである。成程、或教師の試驗は下らぬ事を覺えさせて、さうしてそれを忘れて居ると、非常にからい點を附けて、ドシ〱落第生をつくり、直ぐ忘れても宜いやうな事をホンの試驗時間、一時間か二時間だけ覺えて居れば、それで滿足すると云ふ樣な事があるかも知れないが、それは試驗の方法が惡いのである。さう云ふ忘れても宜いやうな事は試驗をする必要はないのである。之に反して是非覺えて居らなければならぬ基礎的の事實、根本原理と云ふやうなものこそ眞の試驗の題目でなければならぬ。さう云ふやうなことを呑込ませずに、どうして外の深い研究、廣い穿鑿などが出來やうか、吾々は大に呑込み主義を主張したいのである。

第四に又同じやうな事で、或人は斯う云ふ事を言ふ、試驗では決して學生の眞の學力は分らぬものである。前に言ふやうに隨分呑込み主義が勝を制するのであるから、眞に能く理解して居るもので却て惡い成績を得る場合がある、試驗以外に學力を驗するにしても試驗以外に他の方法を求めなければならぬ。此の論も一理あつて、隨分或場合には試驗の急所を突いたものと云つても良いと思ふ。吾々は殊に入學試驗の如きものに付き此の感じを深くして居るのであるが、數千人の受驗生に對して試驗を施すやうな場合には、どうしても問題が器械的に傾いて來る、是れは已を得ない現象であ

るが、併し決してそれで本當の力が分るものではないのである、吾々は常に澤山の志願書を持つて居る學校の入學試驗の不公平なることを歎息して居るものであるが、是れはどうも致方がないのであつて、今日の當局者は種々の方法で成るべく其弊を少くすることを努めて居るのであるから、今日之を進んで咎めることは出來ないと思ふ。又總ての課目に付て試驗をして行くと、各課目は皆な器械的の方法でやつて居るのであるが、其の結果は大抵公平になつてゆくやうであると先づ樂天的に考へて置かなければなるまい。併し是れは避くべからざる塲合であるが、この外の普通の學校內の試驗のやうなものであるならば、試驗者の意圖次第で如何樣にもすることが出來るのであつて、決して眞の學力の現はれない事はないのである。是等は先づ實際上の問題であるが、吾々の經驗して居る所でも確かに斷言し得るのである。

まだ其他に種々の反對の理由があるかも知れぬが、ちよつと氣のついた點はそんなものである。苟も學校敎育が別に惡いものでなく、其の學校の制度を遵奉することが必要であるならば、試驗の如きも徒らに批難し去るべきものでもないやうに思ふのである、尤も試驗の方法は種々ある。それに學校の程度、學制の如何に依て變つていかなければならぬのであるが、先づ一般の普通敎育の試驗の如きは決して全然嫌ふべきものでない、正當であると思ふ。

今度は更に反對の、試驗の利益の點を擧げて見やうと思ふ、其の利益の點が從來の敎育者或は學生の間に、係程看過されて居るではあるまいかと思はれる點が少なくない。

第一に試驗の準備をする塲合から考へて見ると、此の塲合には克己の習慣を養成すると云ふ利益があるのである。それで前にもちよつと述べたやうに、餘り樂な生活をして、それで骨を折らずに終らうとするのは抑も間違つた考である、人が或目的を達する塲合には、其爲めに種々なる感情、情慾等を多少抑へなければならないやうな必要がある、吾々は禁慾主義を唱へる譯ではないが、其の方法として或度までは禁慾的、克己的の習慣を有つて居らなければならない塲合が澤山ある。それは今試驗の爲めにイヤ〳〵ながらも兎も角も少し長起きをして下讀みをするとか、詰らぬけれども復習するとか云ふやうなことは、其事だけを考へて見れば隨分詰らぬ事であるかも知れな

い。殊に自分の將來の職業に餘り關係の少いやうな學科であると云ふ塲合には、それを骨を折つて暗記するのは馬鹿々々しいやうな氣がするかも知れない。併し、一體將來の職業に關係があるか無いかと云ふことは本當に分らないのである。今の學生が中學あたりから一廉の專門家氣取りになつて、自分は文學者だから數學は要らぬとか、自分は工科に這入るんだから國文は勉強しないとか云ふやうな事を言ひたがるけれども、之れは大に間違つた事で、普通學の智識は如何なる專門にも一通りは備へて居らなければならない筈のものである。それは今此處で言ふ塲合でないから詳しく述べないが、兎も角イヤだと思ふ事は、それは人の感情であるから、幾ら普通學が必要であると云つても其の感情を取り去ることは出來ない。矢張數學の嫌ひな人もあるだらう、歷史の覺えられない人もあるだらうが、さう云ふ風なものは試驗には勉強しなければならぬ。其の時分にはイヤなと思ふ心を抑へても目的の爲めに勉强しなければならぬ、そこで極く簡單な克己的習慣を養成する機會があるのである。此の機會を利用して克己の習慣を鍛鍊してゆくと云ふことは非常に便利な事と言はなければならぬ。

それで吾々の試驗に利益があると云ふのは、さう云ふ習慣を養成する一の方法であると云ふ點からであつて、それが苦しければ苦しいだけ必要であると思ふ。又やりやうに依ては堪へられぬ程の苦しみではないのである。

第二に、準備中に於て記憶の練習が出來ると云ふ利益がある。是れは何人も氣のつく所であらう。記憶力を養成する必要があると云ふことは、深く考へれば誰も承認するのであるが、時とすると記憶などは極く低い働きであつて不必要であると云ふ風に考へて居る人も少なくない。それは記憶の種類にも依るのであつて、零砕なる出來事までも記憶するやうな精神作用は稍、無用であるかも知れぬが、人の精神の發達には是非記憶がなければならぬのであるから、其力を適當の塲合に養成して置くと云ふことは無論必要なのである。而して試驗が其の稽古になると云ふことは別に多言を要しないのであらう。

第三には、吾々は試驗の塲合に於て大なる利益を得て居る、それは試驗塲に臨むと、隨分咄嗟の間に、今迄記憶して置いた事を回想したり、或はそれに依て新らしい問題

を即刻に判斷をしなければならぬと云ふことが出て來るのである、是れは人に依ては、其急に應ずると云ふやうな事は餘り必要はないかも知れないが、是れから社會に出て働かう、活動しやうと云ふ人には最も必要な事である。彼の軍人の如きものに於ては最もそれが必要なのであつて、軍人に付て最も忌むべき事は躊躇すると遲疑することであるとしてあつて、果斷を尊ぶのであるが、果斷の習慣は試驗場に於て大に養はれるものであると自分は始終考へて居るのである。その外、又試驗場に於ては自ら人の道德上の資格の試驗が出來るのである、即ち其場合に餘り卑劣な事をするとか、或は答案などを書くにも、教師の意を迎へるやうな答案を書くと云ふやうな事をする者もあるし、それを嫌ふ者もある。それ故に試驗を利用すれば學生の道德的修養の大なる吟味をすることが出來るのである。決して試驗は徒らに人の卑屈心を養成するものであると云ふやうな風に考へることは出來ない、寧ろ道德的練習の場合であらうと思はれるのである。

第四に、其の試驗は後にどう云ふ結果を及ぼすかと云へば、兎角骨を折つた事は長く後まで殘るのであつて、殊に試驗の問題で自分がやり損つたと云ふやうな事は能く記憶することが出來る者である。吾々の經驗に付いて言つて見ても、數學の中で一番能く覺えて居るのは代數幾何の初步である、是れは高等學校の入學試驗を受ける爲に、非常に其方を努めた結果、興味も起り又長く覺えて居るのである。其以後に覺えた數學は實に其の教師に對しては濟まぬ話であるが、多少氣が弛んだ爲めでもあるか忘れて居るのである。その外の學校で習つた事でも無責任になつて居る事は隨分忘れて仕舞ふて居るので、今でも其の爲めに損害を感じて居るやうな事が少なくないのである。斯う云ふ風に考へて見ると、試驗に對する反對說には有力なる理由がなく、寧ろ澤山なる利益の點があると思ふ。

以上述べた事は、學生の如何なる時期と云ふことは少しも言つてなかつたが、それは吾々の考へでは或時期に限らない積りであつて小學から大學まで苟も學校生活をして居る間には皆な是れが必要と思ふのである。小學校の生徒に試驗をしないなどゝ云ふことは、矢張是れも例の衛生主義の濫用であつて、試驗の方法を斟酌するとは必要

であるか知らぬが、競爭心を起させるとか云ふやうなことは殊に兒童に必要であるのである。若し其の競爭に堪へ得ない者であるならば、將來社會に立つたとて何が出來やう。それから又大學の學生などには試驗が無用であると云ふやうな論も隨分あるが、大學の學生と云つてもまだ何も知らないのである是から專門學を覺えやうと云ふ大學生が大層えらさうに一廉の專門家氣取りになると云ふのは大に間違つて居るのであつて、三年なり四年なりの學期間は自由研究とか何とか云ふことを許すべき時機ではないのである。勿論學生の程度に依て試驗の方法は變へていかなければならない、或場合には平日の課業中に交へても宜いだらう、又或場合には筆記試驗、口述試驗、論文試驗と云ふやうな風に變つてゆくのであるが、學校に試驗が無いと云ふやうなことは到底出來ないことであらうと思ふ。若し學生に試驗が無ければ、世の中に學生程樂なことはないのである。

斯樣に云ふと、甚だ詰らぬ敎育家的の事を言ふやうで、眞の大人物を養成するさ云ふやうな事はまるでないやうに考へられるか知らないが、それに對しては先づ誤解を避けて置かなければならないと思ふ。全體大人物と云ふのは極く曖昧な事であつて、今の先輩とか何とか云ふ人は、自分が不規律な敎育を受けて、さうして不整頓な社會で成効と云ふものをやつた方々であるから如何にも大人物であらうけれども、今後の社會はさう云ふ譯にいかなくなつて居る、唯精神ばかりえらくても殼である、矢張之れに應ずる技能がなければならぬ、無論技能ばかりでは器械見たいなものであるから人間ではないのである、併し技能をまるで無視するやうな事があつては極めて弊が多い、それで學校では無論精神敎育もやらなければならないが、大部分は知識能力の發展、と云ふことはあるのであらうと思ふのであるからして其點を能く完備させて置かなければならぬ、其點を完備しないで唯氣慨とか人物とか云ふやうな事ばかり言ふのは粗大なる意見であつて、決して眞の敎育の方法ではない、それであるから學生の第一義は學校の課業を能く勉強するにある、學校の第一義は學生をして學校の課業に興味を持たしむるのである、さう云ふ立脚地から今試驗を論じたのであつて、試驗ばかりで他の事は構はないと云ふ意味ではない。無論一方には他の修養を餘程努めなければ

ばならぬと思ふ、唯併し、修養の一の方法として試驗が用ゐられると云ふことを信じて居るからで、其の點は前に試驗の利益を述べた所に於て聊か述べて置いた積りである。

併し吾々は決して學校の課業其物だけで滿足だとは思はないのである。又學生にとつても唯課業だけ勉强して居ると云ふやうなのが吾々の理想とする所ではないのである、今の學校の課業なるものには隨分缺點が多いのである。又學生一般に課してあるのであるから、隨分或學生にはやさし過る、又餘裕が十分つくと云ふことがある、さう云ふ人はそれ〲自分の好む所に就て殊に文學的などの修養を努めてゆくことを必要とするのである。學生の中には唯課業ばかり勉强して、少しも餘裕のないやうな者もあるが、それは決して將來大に發達すべき資格を備へて居る者であると云ふことは出來ない。或學生は課業はそつち退けで自分の能く理解しないやうな書物を讀んだり、或は人生をはかなんだり、詩歌俳諧をひねくつたりする樣なのもあるが、それが爲めに自分の本分をまるで無くして仕舞ふと云ふのは隨分弊に陷つたものと言はなければならぬ、それで吾々の試驗はさう云ふ風な學生を眼中に置いて居るのであるから、適度に勉强して居る人に取つては知れきつた事で、說くに足らぬ事であるかも知れない。

論の序でとして現今の學生の氣風に就て少しく述べて置きたいと思ふ。一體如何なる社會にも二つの正反對の要素が成立つて居ると云ふことは避くべからざることであつて、是れは却つて社會の發達に有益なものであらうと思ふのである。學生の氣風に付て考へて見ても種々あるが、結局そのどれか一に歸すると云ふことは不必要であらうと信じて居る。併し餘り甚しいのに陷ることは避けなければならぬ、其の以外に少しづゝ人の特別の性質が這入つて來るのは避くべからざる事であらう、例へば今日でもあるのであるが、一方には極く疎暴なる風をして居るのがあり、之に對して極端なる優美な風をして居る者がある。即ち蠻カラとハイカラとでも言はうか、一方の人は所謂衣は肝に至り袖腕に至ると云ふ風で鐵拳制裁などを得意にして居る連中であるが、一方は中學生ぐらゐから贅澤な紳士氣取りで居る連中である。先達汽車の中で或

學校の中學部の學生を見たが、二等列車に乘込んで、香水の匂ひなどをさして如何にも紳士然として居る、どッか海水浴場から歸つて來たらしい。所へ國府津から其友人が、矢張少年の學生であつたが乘込んで來た、是れは湯本あたりへ家の人かなんかと行つて居たと云ふのであるが、大磯で汽車を下つたのである、山に厭いて一寸海に行かうと云ふやうな躰裁であつた。所が又其頃に自分は富士山に登つたが、之と正反對な學生に出會つた。それは富士山の絶頂を下駄がけで自然木のステッキを振りつゝ足早に登山して居るのであつた。此の兩方を對照して見ると實に雲泥の差ありと言つてもよからう。自分の感情では紳士風をする學生は稍、學生らしくないと云ふ風に感じたのであるが、其後、今日に於て能く考へて見ると、さう云ふ事を咎めるのは或は間違つて居るであらう。その人に對しての生活の度もあるし、又將來の職業もあるし、强ち若干の奢侈をしたからと云うて、それを奢侈として咎むべきものではないやうである。粗暴にするのも其人の好き、飾るのも其人の嗜きであるから餘り嚴しい規則を造るのは間違つて居るだらうと思ふが、併し何れにしても、或度までは許すとしても極端に走つては困ると思ふ。自分の理想から言へば、美術等に傾いて居る學生とか、或は富裕なる家庭に育つて居る學生などは幾らか贅澤に暮しても咎むべき事ではないが、用も無いのに一、二等の列車に乘るとか、書生の身分で或は暑を山や海に避けて歩いて居るとか云ふ樣なのは、或度までは良いけれども、其度を越してはならぬ事だらうと思ふ。それでさう云ふ風な氣風があると、氣風それ自身は惡いのでないが、それが學生の本分と遠ざかると云ふ場合には咎むべきやうになつてゆくのではあるまいか。試驗がイヤであるとか、樂がしたいとか云ふのは、詰りさう云ふ風な學生の本分を遠ざかつて行く側から生ずる結果であつて、さう云ふ弊に陷る場合には敎育者は餘程注意して居らなければならないであらうと思ふ。或先輩は今の大學生などは餘り紳士的になつて居つて、將來の事ばかり考へて學生らしくないと云ふやうな事を言ふが、是れは或度までは今日の事情已むを得ない所があると思ふ。今日では昔のやうに卒業して直ぐ重く用ゐられると云ふことが餘程少くなつて居る、然る上に活きなければならぬ人間であるから生活問題に苦しめられると云ふことは避くべからざることで

あらう、之を自個の經驗だけに訴へて咎めるのは間違つたことである。一體先輩の忠告などは兎角さう云ふ弊が多いと思ふ。されはどうしても形式が過去の學生と今日の學生とは變つていくのである。ハイカラ風になるのも良いと思ふ。又種々文學談などで持切つて居るのも大に進んで居る學生と看做して良いと思ふ。又一方には運動に熱心になつて居る學生もある、それも良いと思ふ。又或は忠實に勉强して居るのも決して惡くはない。樣々の氣風があるので却つて社會にいろ〳〵面白く發達を遂げるのであつて質朴な風にならなければならないとか、大人物でなければならないとか云ふやうな事を云つて統一しやうとし、さう云ふ風な偏頗な主義で固めやうと云ふのは大に不賛成である、種々の氣風を發展させつゝ、唯それが甚しきに至らない、即ち本分を脫しないと云ふ所に止めて置くやうにしなければならぬのであると思ふ。其の本分に背馳させない一の方法として考へて見ると、試驗も其方法の中の一であらうと思ふのである。隨分敎育者などの中には試驗を行ひつゝ試驗の意味を忘れて居るやうな事がありはしないか、成立つて居る方法を出來るだけ利用するのは良いのであるから、試驗に就ても努めて方法を改良するやうな事を考へていかなければならぬのである。それで今日は試驗者の方に對して言ふ積りではないから、たゞ試驗を受くべき方に對して、試驗が十分利用されるもので有ると云ふ事を聊か述べて見たのである。

(明治三十七年九月)

處世法に就て

近頃青年の學問に從事するに當つて、先づ其學問の將來に於ける實益如何と云ふことから顧慮して來ると云ふことであるが、例へば學校に入學するに當つても、先づ某の學校は、卒業したらどの位の俸給を得られるか、如何なる地位に有付くかと云ふやうなことを考へ、其問題を決定して、さて自分の力量のそれに適するや否や、其他其學校の完全不完全等を吟味するやうになつて居ると云ふ事である。此「中學世界」などの質問欄などにも澤山其種類の質問があると云ふことであるが、是は餘程深く考ふべき問題であると思ふ。吾輩は敢て此事を、今日の青年が餘り實利的になつたとか、或

は餘り因循姑息に流れたとか云ふやうにのみ解釋し去らうとは思はない。或人は曰く、自分等の學校に居つた時には殆ど學校を出てから如何なる社會に這入るのであるか、如何なる職業を採らねばならぬかと云ふやうなことは少しも考へず、唯學生として天下の大道を横行濶歩し、それ〳〵の課業を勉め研究し、適當な運動などに耽ると云ふことの外に別に餘念はなかつたものである、要するに極めて自由な、又天眞爛熳な生活を送り得たものであるが、今日の學生は、中學生あたりから稍々大人じみて居つて、自分の將來の位置などを頻りに考へたり、況して專門の學問を修めるやうになつて來ると、學校に這入り或は學問を修めると云ふ事は全くの手段で、其目的は他にある、地位を得るとか、或は富貴榮華に到達すると云ふことに外ならぬやうになつて居る、それ故に其擧動が如何にもぢみで、或は着實と云ふ長所はあるか知れぬが、一方に活潑英邁の氣象を闕いて居ることは疑ふべからざることである（尤も多少の例外はあるが）斯樣に學生として充分に樂むべき自由の生涯を自ら棄てゝ、窮屈な處世の問題に屈託すると云ふのは、實に避くべきものでないかと言ふのである。吾々も此考に一致するのであつて、現に二三の人々が大學に入るや否や、此學科は果して官吏となるに適して居るや否やと考へる。或は此學科を卒業したならば餘程有望なものとなるかと云ふやうなことを初めから考へて居る人があるのを見て、何ともなく一種の厭氣を生じたことである。吾々なども學生の間は實に自分等の境涯程えらいものはないやうに考へて、極めて暢氣に世を送ることが出來たものであるが、斯樣に學生の中から既に其快樂を禀けることが出來ないと云ふのは如何にも不幸なものと言ひたいのである。

が、併し又一方から考へると、此傾向は實は深い理由の有ることであつて止むを得ぬことであるとも言はれるのである。それは、第一に今日の社會は過去の社會に比すると、餘程生活の困難が增して來て居る、極く手近な所で見ても、種々の文明機關が備はると共に便利も得たが其代りに奢侈或は奢侈と云ふ程でなくとも少なくとも昔日の如き簡單な生活は實際出來なくなつて來たのである。或人は之を非常に慨嘆するが、それは甚だ愚なことであつて、世の進步の必然の結果を無視して居るものと云はなけれ

ばはらぬ。吾々は決して今日の如き奢侈、或は贅澤なる生活を絶對に非難しやうとは思はない、人間はあらゆる點に於て發達すれば宜いのであつて、無論精神上の發達も重要であるが、物質上の滿足も些つとも避くるには及ばない、美衣美食は何人も欲せざる者はなからうと思ふ、故に此生活の困難は實際上避くべからざる又當然なことゝ認めて置いた所で、此社會に立働かうと云ふ今日の人々は、どうしても學生の間から實に其影響を感ぜざるを得ない、故に吾々の卒業時代を以て過去に比すると確かに餘程な變化が其處にあつたと思ふが、今日の有樣は更に又甚だしきものがあるのである。一例を擧げれば、書生の會合などゝ云ふものは、舊は僅かの會費で茶話會を爲すに過ぎなかつたのであるが、今日では其數倍の費用を以て酒話會を開くと云ふやうな形になつて現はれて來て居る。或はもう一歩進めば立派な西洋料理の會合などもあるのである。從つて平常の生活が總て之に準じて居る。斯樣な有樣であれば處世問題が著く學生を屈託せしむると云ふことは、其學生が非常な富裕な家庭に成立つた人か、或は極端な暢氣主義の人でない限りは避け得られぬことであらうと思ふ、デ吾輩は寧ろ今日の學生の狀態に大なる同情を持ちたいのである。

第二には、矢張り前の中に多少包括せられて居ることであるが、少し詳しく言へば今日の社會は餘程相應の智識を具へた人も多くなり、從つて或一科の學術を專攻したと云ふ樣な者には、同類者の數が昔日よりは多くなつて居る。それで同類相扶くると云ふことも出來るが、其代りに澤山の人々が同じやうな目的物に向つて競爭しやうと云ふやうな傾向が自然に生じて來る、是が確かに今日の學生或は卒業生等に取つて大なる打擊を與へて居るのである、昔ならば一廉の學術を修むればこちらが求めずとも忽ちにして非常な好き位地を得られる、所謂沽らん哉沽らん哉、吾は値を待つ者なりと言つて居ても、何時の間にか賣れるのである。が、今日では斯樣な場合は極めて稀れで、價を待つて居つたならば永久賣れる見込の無い人が多からう、而して學生の間に非常に暢氣に自由に遊び暮すと云ふやうなことも多くの場合多くの人には少なくなつて來る。即ち是は先程も述べたやうに、學科の撰擇をするのに先づ其學科の實益如何を究めしむるやうになつて來る原因であらうと思ふ。

先づ斯様な次第で、今日に於て處世の問題が、若き學生の頭を苦ませると云ふことは已むを得ぬことであるから一概に之を罵倒し去らないで、深く其境遇に同情を表すると共に多少今日の學生の苦心の仕方の中に誤りがある所を明かにして置きたいと思ふ。

先づ處世の問題を定むるに當つては、第一に處世の大方針を定めて置かなければならぬ。或は處世の目的と言はうか、即ち人々が學術を修め、或は其他の方法で社會に立つと云ふには、如何なる目的を有つて居るのであるか、又一体身を立て道を行ふと云ふのは、如何なる意味を有つて居るのであるか、と云ふことを能く明かにしなければならぬと思ふが、多くの學生は所謂成効と云ふことを目的として居るかの如く見える。併ながら無論不成効を目的とする人は無いが、此の成効を目的とすると云ふことの中に、非常な誤つた、又卑むべき意味が含まれて居ることを知らないものと言はなければならない。今日人々の謂ふ成効は、或職業に依つて相應の地位利益等を自己が收得すると云ふことにある、併ながら此の成効は果して完全に達せられる成効であらうか、どうか、多くの場合にはさう云ふ様な成効は殆ど得られない、所謂水に描く繪である、成効は人の慾望と並行して居るものであるが、人の慾望には限りがないものであるから、或る一二成効を得れば、更に他の成効を求める、斯様にして何時眞の成効が來るやら殆ど分らぬものであるのみならず、自分の事業が社會に非常な好い結果を與へると云ふやうなことは、なか〱遭遇も出來なければ、計算も出來ない、故に事業の容積で成効と否とを判斷しやうと思ふのは、是亦大なる迷想である、デ吾々の方針を、若し此成効と云ふことに置くと、遂に毫も滿足を得ないものとなつて來る。於是か所謂煩悶となるのであつて、煩悶にもいろ〱あるが、斯様な種類の煩悶が隨分今日の人々の性情を支配して居る、初めから出來ないことを求めてそれが求め得られないので煩悶すると云ふのは隨分誤つたこと〻言はねばならぬ、それ故に吾々は處世の方針を定むるのに成効と云ふやうなことでなく、他のもつと高い目的を求めねばなるまい、其目的を説くには先づ世の中と云ふもの〻如何なるものであるかと云ふことを考へてか〻らなければならぬ。

一體世の中は樂しいものであるか、苦しいものであるか、樂天か厭世かと云ふやうな事は、隨分眞面目に人々を苦しめる問題であつて、又之に對して種々の解釋も施されてあることであるが、併ながら多くの場合には此厭世と樂天との區別は意味の無いものになつて仕舞ふと思ふ、全體苦樂と云ふのは人の心にあるものであつて、物にある性質ではない、同じものでも、或時には樂しく見える、又こちらの方に不愉快の心があれば、非常に苦しくなる。人々の間、自分一己の中でも、始終苦樂は變化しつゝあるのである。要するに物を苦と云ひ、樂と云ふのは吾の心持、言ひ換へて見れば、主觀的評價と云ふに外ならぬのである。哲學上の深い理窟を籍りて言へば、世の中は主觀的である、世の中の物が元來吾々の心を離れては成立たぬ如く、世の中の苦樂は全く吾々の心に關係すると言ふことが出來る。平たく言へば世の中は人々の想ひ做し一つである。それであるから樂天の時もあらうし、厭世の時もあらう、必ずしも一方にのみ眞理があると云ふものではないが、又兩方とも一面の理のみ見て居るに過ぎない。それであるから、吾々は世の中と云ふものをまるで自分の心と物の關係のことゝ考へずに、全く心の考方で如何樣にも變るものと認めて、そして此世の中の苦樂の問題に超越しなければならぬ、併し無論世の中は完全無欠と云ふ譯ではないのであるから、何方かと云へば、苦痛の方が隨分我れの注意を呼起すのである。それ故に世の中は思ひやうで如何樣にもなるが、併し又兎も角苦痛と思はれる場合が多いと云ふことを許して、さうして吾々は其苦痛を避ける方法を考へなければならぬ。是が即ち自分の働きであるので、自分の働きを離れては世の中は永劫苦痛で、全く生活をする價の無いやうなことになつて仕舞うかも知れない

さう云ふ譯であるから、要するに吾々が世に處する上に就ては、第一に此苦痛（苦痛と云ふ中には無論物質上の苦痛ばかりを意味するのでない、種々の罪惡等も含んで居るのである）即ち不完全なる狀態をして益々完全の方に近かしめると云ふ働き、其倦むことなき働きを繰返しつゝ進むと共に、一方に於ては此世の中は自分の考次第で苦痛も感じないやうになることが出來る、或は言換へて見れば、世の中を快樂と感ずることも出來ると云ふことに着目しなければならぬ。一方に於ては既に吾々は永久の

活動不斷の努力を行ひ、一方に於ては其努力を休むるために如何ともする能はざる所の諦めと云ふことを必要と思ふのである。即ち吾々の義務としては、無論如何なる障害にも打克つと云ふ精神がなければならぬが、一方に於て如何に努力しても、其結果の現はれない時に自分の心を慰藉する所の諦めると云ふ働きがなければならぬ。初めから諦めて居つては詰り何も出來なくなつて仕舞ふので、世の中の進歩も何もありはしない。それで宜いと云ふ人は仕方がないのであるが、普通の人は進歩しないよりは、進歩した方が望ましいのであるから、餘り早くの諦めは奬勵すべきものとは思はない、唯だ如何に努力しても、自己の心に十分なる滿足を得ないと云ふ場合に、例へば疾病に罹るとか、或は不時の出來事が妨害を與へるとか、或は轗軻不遇であるとか云ふ場合になつた時に於て、此の世の中の結局吾々の心を離れて居らないものであると云ふことを認めて、乃で所謂諦めるのである、此諦める心が如何にしても起らないと、全く餘裕がなくなつて眞に憐むべき姿に陷つて仕舞ふ、若し此努力と諦めの二つを適宜に結付けることが出來たならば、世の中には何等の不平も起らず、何等の騷動も混雜も問題も湧いて來ないであらうと思ふ。併し是は唯理想を言ふたことで、無論此世の中は元來完全に出來て居るのでない、又吾々自身も自分の利害を全然感じない譯には往かないのであるから、爲し得る限りは世の中をして青年の意思に適うやうにさせることが必要である、從つて自己の利害を全然棄てると云ふことは出來ないのであるが、唯だ自己の利害のみを考へて眞の目的、眞の理想を忘れて居るやうなのは、最も處世の道を知らない者と言はなければならぬと思ふ。

要するに、吾々は吾々に與へられたる本務を十分に盡し得たならば、それで非常な滿足を得るのである、其所謂十分に盡し得ると云ふのは、必ずしも之に依て大利益を起したとか、或は大功名を立てたとか云ふ意味ではない。唯自分の其事業を行ふ時に具有して居つた力、(或は能力、或は活力)を出來るだけ働かして、大なる努力を爲すと云ふ所に、吾々の眞の滿足は在るのである。必ずしも其の結果の如何は敢て問はない、結果の善いと惡いとは勿論或度までは考へなければならぬが、所謂成功すると否とは是れは全く吾々の關知せざる所である。吾々は唯自分の本務を盡せばそれで非常

の滿足を得るのである。斯く盡すと云ふ瞬間の働きが、それが吾々の目的を達したことになるのである。斯樣に考へて見て、一方には怠惰の精神を棄て、一方には羨望と云ふやうな精神を棄てると云ふ所に、眞の處世の方針があるものであらうと思はれる。畢竟世の中の成敗は末の事であつて、吾々は吾々の義務を盡す所に時々刻々眞の意味の成效をしつゝあるのである。斯樣な方針を定めたならば、之に由て職業の撰擇とか、或は職業を盡す方法などを定めることは、極めて容易なことであらうと思ふ。即ち此の處世の方便を論ずる譯であつて、全く上來の理論から論結することが出來るのである。試に簡單に其點を附加へて置かう。

先づ處世の手段としては職業の撰擇と云ふことが起つて來るから、是れには前述べた如き賣口がどうであるとか、或は地位物が如何とか云ふやうな些細にして、且つ末なる事には重きを措かないで、先づ次の大眼目を定めなければなるまい。

第一　自己に適切なることを擇ばなければならない

如何なる職業でも、無論社會に認められて居るもの、或は又少なくとも社會の一部分の認めて居るやうな職業であつたならば、之を修めて惡るいと云ふものは一つも無い譯である。それに依て全然處世の問題——其日々々の生活の問題に、全然無關係になつて行くことは全く無いのであらう。であるから成功とか、不成功とか云ふことを考へずに、第一に自分に最も適切なることを擇ぶと云ふ方針でなければなるまい。世の中の人の中には、工科が儲かると云ふので、數學の力が無い癖に工科の學業を修めやうとしたり、或は法律は能く分らぬが、文官になるには便利だからと云つて修めたりすると云ふやうな者がある。或は自分は好まぬが、父兄長者の命に依つて止むを得ず或學科を修めると云ふ如き人がある。此等は何れも自己に不適切なるものを擇んだので、其結果は却て自己の好むものを修めた場合よりは、遙に劣つて來るのである。若し何々成效を望むと云ふことはなく、唯働くと云ふことは値打があるとしたならば、何で働いても同じことである。則ち自分の最も適したるものに由つて働くのが一番都合の好い方法と謂はなければならぬと思ふ。

第二　職業の撰擇には吾々の品位を墜さぬものを擇ばねばならぬ

如何に利益が有らうが、如何に有望な地位を得られやうが、今日の社會に於て品位に關係するやうな職業は成べく避けなければならない、無論職業には尊卑なしで、大臣でも車夫でも職業の大きい小さいの別はあれ、其職業を執つて居る人の働き次第で、何も別に尊卑のある筈は無い譯であるが、併し今日の不完全なる社會では、矢張り或職業はどうしても比較的に不正當な分子が餘計這入つて居る場合がある。さう云ふやうな職業は成るべく避けるのが至當であらうと思ふ。尤も各人皆な其の業を避けたならば、其職業は全滅すると云ふか知らぬが、全滅しても善いやうな職業が隨分在るのである、さう云ふ職業は寧ろ無くなる方が宜い、併し又本來惡るい性質がない職業でありながら今日一部分の人に依つて潰されて居ると云ふ様な職業があるかも知れない。さう云ふ場合は如何と云ふに、それは程度或は事實の問題であつて、今此處で一々一般に言ふことは出來ない、或場合には自分が故らにさう云ふ處で、自分の精神を練磨しやうと云ふ如き人もあらう、それは今一々此處に述べる限りでない、唯一般に言へば成べく今日の不完全なる社會に於て間々不正當と見做されて居る職業は避けたならば宜からうと思ふ。

此の二つの要件を守れば他は何事でも宜い譯である、何等の小さな職業でも又何等の迂遠な職業でも、吾々は唯其の職業に依つて自分の能力を十分に發揮することが出來ればそれで宜いので、それ以外に其の職業を如何に利用すると云ふやうなことは、是れは初めから考へて居る必要はない。無論吾々は全力を盡して或職業を爲して居る時には、それが最も有利なる結果を持來すと云ふことを信じつゝあるのである。

扨て此の職業を擇んだならば、次には其の職業を盡す方法を明かにしなければならぬのであるが、それは委しく言ふまでもなく、所謂勤勉、誠實等が種々の德の中でも、最も大切なことである、是れは極めて平凡なことであるが、其代り最も實行はされて居らない部分である。今日の人々には勤勉の精神は殊に缺けて居ると云ふ非難を屢々聞くのである。尤も吾々初め隨分横着なことが好きであるが、又自分の職業に對して勤勉に忠實にすると云ふ精神が全く缺けて居るやうな人は、實に眞の處世の資格が無いものと云つても宜からうと思ふ、是れは理屈を說き或は說法をした所で別に効能はない

のであつて、お互に自分の心に能く注意をして此の習慣を養ふやうにして往かなければならぬ事柄である、此點は別に今委しく述べる必要は無からうと思ふ。

要するに議論がいろ〳〵になつたが、此の處世の問題が、今日の學生までをも苦しめて居ると云ふのは甚だ望ましからぬことであるが、そこには止むを得ぬ事情もある。夫故に其點は十分に恕することが出來るが、併し又今日の多くの人々の苦しむ所以は成効と云ふ卑しき動機にあるのであるが其の迷想は破棄して仕舞つて吾々の世に處する唯一の目的は働らくことにある、結果の如何は吾々の想ひ做しであきらめることが出來ると云ふことを深く考へて、其方針に依つて職業の撰擇、或は職業に盡す態度を定めて往かなければならぬと云ふ次第を順次論じて來たのである。（明治三十七年十一月）

學問と成功

▲悟入の語　自己の職業によつて悟入した點をと言つても、自分は現在まだ修養の道程にあるので、前途を望めば、丁度千里を行く旅人が、十里ぐらゐの所で己が行手を眺めるやうに、茫漠として轉た遼遠の感がある。その道程にあるものが、悟入なぞとは以ての外の事で、一體悟入といふ言葉は、堪能な藝術家——繪畫とか、音樂とか、彫刻とかの——若くは一代の名僧智識と仰がれる人などに適用されるので、汲んでも汲み乾せぬ學海に掉しつゝある者に向つては、些か不適當の語たるの感を免れぬ。で、自分は一般的に

▲學問と成功　といふ事に就いて述べやうと思ふ。哲學其の他の學問と成功との關係は、稍や異樣に感せられる。元來凡ての學問、わけても哲學の如きは、人間の智識慾から自然に發生したものであるから、それが果して終局に如何なる結果を齎すか、或は奈邊までの成功を得るか、最初から定めて掛かるのは頗る困難の事で、又その必要もない。學問を修むる人は、一意たゞ自己の欲する所に從つて、專念に種々の誘惑に抗ひ、一度定めた方針は何處々々迄も變更してはならぬ。

其結果として、或る驚嘆すべき學術上の大發見が出來るとか、或る立派な、學界を

益する程の學說を組織する事が出來るとすれば幸福である。然し若し出來ぬにせよ、最初の目的に從つて、自己が努力すべき限りを盡したならば、學問研究者としての目的は達せられたのであつて、其他また何をか望まんやである。實業、政治等と學問との相違は實に此點に存するのである」。

▲成功の二意義　成功には二種の意義がある、其の一は外部的成功で、其二は內部的(或は內心的)成功、換言すれば、客觀的成功と主觀的成功である。

▲客觀的成功　とは何か？是は成功を以て、單に外部の或る結果を得る、といふ意味に解釋するのである。ところが此の外部の結果なるものは頗る不確實、且つ不明であつて、果して奈邊まで到達すれば、所謂その結果が得らるゝかは容易に判定し難い。人間の慾望心といふものは無限のものであるから、一の結果を得れば、直ぐに他を求める。つまり望蜀の念といふ奴に始終驅られて居る。だから到底何れが眞の成功を得たものであるか判斷に苦しむのである。して見ると如何なる業にせよ、成功を只だ外部にのみ求むるのは不完全であると言はねばならぬ。そこで自然の勢ひとして、

▲主觀的成功　に憧れるやうになる。即ち自己の內心の滿足を主にするので、自己の豫め要求する一の目的が、ある方便によつて達せられたならば、それで一個の滿足を得るのである。其の範圍に於て、其の人は成功を得たものと言はれるので、此意味の成功は悉く內部に存して居る。

主觀的成功の方は、如何なる事業にも當然存在して居るものであつて、學問を修むる者に於ても亦然りである。故に學問に從事する人々にして、外部の成功即ち客觀的成功を欲したならば、殆んど無意味に終る事が往々有るが、主觀的成功を得るがためには、飽くまでも努力奮進せねばならぬ」。

さて內心の滿足を得るといふ事は、一寸簡單の仕事のやうであるが、之を求めるためには、種々の準備を要する。準備が成立してからが、また非常の努力を拂はねばならぬ。而して、眞の內心の滿足をうるためには、適當なる外部の成功自然に伴ふべきて、若し然もないと、徒らに一時の、極めて皮相的の滿足、成功が得らるゝのみにて、眞の修學の趣意には背くに至る、茲に於てか修學の人々にも、志を立てる前に、果し

て自分は

▲**修學に適當なる資格**を具備して居るや否やとの問題が起つて來る。世の中には學問を慰みにしてゐる者がある。即ち他に何等かの一定の職業を有してゐて、その餘暇に修めて樂む人々で、是等は强いて資格を調べるにも當らぬが、苟くも學問を以て一生の事業、天職としての事業と思つて志す人にあつては、自己が果してその修學に適してゐるか否かを豫め考へる必要がある。

然らば適當の資格とは何であるか。詳細に論じたならば、種々の條件も出て來るであらうが、最も主要なる事を約めて言へば、第一、自己の智力が發達して居るか否か、第二、確固不拔の意力を有するか否か、といふのに歸する。この二者は極めて必要條件であつて、若し自己の智力が未熟で、理解力も鈍ければ、創始力にも乏しい、記憶力も薄い、十を聽いて一を悟る底の人物であつたらば、到底深遠なる學海に乘出すべき資格はないのである。併しまた、假りに學才は充分有るにしても、努力して倦まざる精神が無かつたならば、其人は長く研究を續ける事は出來ぬ。中途で斃れて了つて、空しく小天才の名を負つたに止るのである。

だから、學問は好きであるが自己の頭腦は充分發達して居らぬ、と自覺したものは、學問を樂む人になるのが好いのである。他人の研究を見て喜ぶといふ側に屬するのが好いのである。さもなくて、斯の如き人が自ら研究に從はうとしても、却てそれは無益に終るので、何の獲る所も無からう。寧ろ自己に適當なる職業を見付けて、自己の長所を飽くまでも發揮させた方が得策である。

繰返すやうであるが、修學の志ある者には、學才が必要と同時に、それに伴ふ確固不拔の意志が必要である。世の才子と稱する者が、往々にして失敗するのは、意志の薄弱なのに基因するので、學問のやうな地味な根氣仕事には、不撓不屈の精神を要するのである。

人間の一生の事業は種々ある。必ずしも學問ばかりが貴いものではない。眞正な意味から言つたらば、如何なる勞働も神聖であるからして、もし自分が到底學問研究者の資格を具備して居らぬと覺つたならば、何も强いて研究者となるには當らぬ、宜し

く安んじて他の職業に就き、學問に對しては高尚なる鑑賞者となつて甘んずべきである。で、以上說き來つたところを總括して、

「▲**學問に成功**する要素をいへば、學問研究の資格ある者が、研究の途に立つて、常に主觀的滿足を得るといふ事に存するであらう。

さて轉じて、自分の修養の道程に於ける障害物は何であつたか。これは大分個人的の事に涉るから、詳細には言得ぬが、自分は一體、小學、中學、高等學校、大學と順序よく踏んで來たので、人の好奇心を惹起するやうな波瀾萬丈の道を經て來たのではない。たゞ精神上の轉化の道程から言つたならば、高等學校時代に

▲**懷疑論**に陷つた事がある。之は誰しも一度はやる事で、高等學校時代と言へば、乾燥な普通學を無暗に注ぎ込まれた中學時代を出で、自分の專攻學の門口に一寸踏入つた時である。で、今迄の事を顧れば無意味の樣でもあるし、前途を望めば遠くもあるし、稍々戶惑ひの氣味で、潑溂たる意氣で猛進して來たのが、少し銷沈する。頭腦が朦朧となつて、社會を疑ひ、人生を疑ひ、學問を疑ひ出す。人生の意義に惑ひ、學問の權威を感じなくなつた時が、人生の一番苦悶する時で、明暗の境に彷徨する高等學校時代は、丁度之れである。

此時代が學生の最も危險な時で、光明を認めずに懷疑其儘で終る人もあれば、物質的に墮落するのもあり、非常な情熱家に至つては、死を以て此苦悶を免れ樣とするのがある。(藤村操の如きはそれで、世の冷かな敎育家などは攻擊するが、自分は同情すべき點が多くあると思ふて居る)。死んだ親友の蟹江義丸君なども此經驗はあるので、自分が嘗て「蟹江君を憶ふ」といふ題で話した中に、「從來の傳說的道德といふ物は、少しも信じるに足るものでないと、深く考へて居つたのみならず、往々極端なる意見を持つて居つた。と言ふのは、文學の研究に傾いて、非常に感情的の傾向を帶びて居たので、其點に於ては全く所謂靑年の懷疑的時代の特色を悉く具へて居たのである」とある通り、誰しも一度は之に陷る。たゞ自分などは幸に、多少の智の力を以て情の奔放なのを抑えて居たから、不幸の結果を見ずに、次で來るべき批判時代に移つて、今日迄研究を續けて來たが……まア、其間の心的變化も詳しく言へば面白いこともあら

うが、大體はそんなものであつた。（明治三十九年一月）

卒業生の分布に就て

卒業生の分布と云ふのは一體言葉が面白い、分布と云ふ言葉は植物學や動物學などで能く用ゐる言葉であるが、如何にも、各種の植物が種々の地方に繁殖して居るとか、或は動物が熱帶や温帶、寒帶等に夫れ〳〵變つて發生して居ると云ふやうな譯で、即ち或る學校で一廉の專門學を修めた卒業生は夫れ〳〵自分の適當な、即ち自分に最も適合して居る境遇に分布して行く筈のものであつて、其有樣は實際植物動物等と變らない所があるかも知れない。此分布に付て何か意見をと云ふ事であるが、併し別に大して、新しく珍しい事も考へて居ないのである。

先づ第一に、分布は廣くなければなるまい、即ち場所から云つて、遍く各地に種々の卒業生が配當されると云ふことが必要である、例へば中央の都會にばかり、重立つた卒業した人々が固つて仕舞ふと云ふのは、此頃多く見受けることであるが、如何に考へても、これは弊害と言はなければならぬ、此の狀態が永續して居る間は、中央と地方とは、獨り繁華の點からばかりでなく知識の點に於ても、何時でも、非常な懸隔が付いて居て、中央は益々發達するのに、地方は益々凋落すると云ふ有樣になつて來る、それで無論、此國家とか社會とか云ふ上から考へて行けば、相當の力量を有つて居る人々が、山間僻地にも出掛けて行くと云ふことは、最も望ましいことゝ謂はなければならぬ、實業上の技倆のある者が、地方の小さい都會に行つて事務を執るとか、文學理學の學識のある者が、地方の中學敎育に携はるとか云ふやうなことは、最も必要なことなのである。然るに、兎角中央に集めやうと云ふことを思ふのは、無論中央に居れば、一般には餘計に發達する見込はあるが、併し場合に依ては、決してさうとも限らぬのみならず、同じ社會の上から云へば、斯樣に一緒に集合すると云ふことは、極めて不得策のことゝ言はなければならぬ。無論、其社會の爲めから言つて、分布が場所的に廣い事を要するのみならず、尚卒業生自身一個の利害から考へて見ても、大

勢同樣の力量のある者が、一緒に集合して、互ひに少ない目的物を競爭すると云ふのは、最も愚策と謂はなければならぬ、或は一時の苦痛を忍んで、將來の大發達を期すると云ふやうな爲に、暫く地方行を見合せると云ふ人もあるが、それは目的がある塲合には、無論大に必要なことであるが、併し隨分人に依り、又職業に依ては、確に見込の乏しいものが少くない、夫れに拘はらず、空想に耽つて、アタラ力量を適當に使用することが出來ないと云ふのは、自己の利益から言つても、隨分損なことゝ謂はなければならぬ、吾々は、矢張普通の話であるが、兎に角分布は、極く廣くしなければなるまいと思ふ。

次に其卒業生が取るべき職業上の分布も、是も極く廣くなければなるまい、言換へて見れば、雜多な方面各方面に、專門家が向つて行くといふことが、非常に必要なることゝ思ふ、此の節では、有望な人が、皆官吏になるとか云ふやうなことに極つたこともないが、併しマダ〱專門家の執る職業が、餘程偏して居る所があるだらうと思ふ。或職業は、社會から一般に輕蔑されて居るとかいふやうなことが隨分あるが、併し職業の尊卑などと云ふことは、實はないのであるから、餘り一方に偏するやうな傾向は、努めて止めなければなるまい、唯玆に注意すべき點は、職業には無論尊卑はないが、併し其職業に依つて人々の品格を害するやうなことがあつてはならぬ、其虞れの比較的に少い職業と、それから今日の社會上、未ださういふ虞れの餘計ある職業上の區別は、多少あるかも知れない、理想から云へば、何ういふ職業も、之を執る人の精神如何に依つて、皆高尚になる筈であるが、併し多少社會の實際上に束縛せられて、さういふ譯に往かないで、其理想が行はれないことが、時としてあるのである、古人の言つたやうに、弓矢をつくる人は、多少不仁な人と言はれるかも知れない、其邊は、幾分か、實際上多少斟酌はしなければならぬだらうと思ふ。それで職業夫れ自身には、決して高下もないが、併し自分の品格を墜し、自分の道德的價値を減ずるやうな、即ち多少の惡習慣を助長するやうな職業は、一廉の學問を修めた位の人ならば、先づ避けて居なければならぬ、其他の點に於ては、如何なる職業を執るも、變れば變るほど宜いことだらうと思ふ、彼の報酬の如何に依つて、職業の差別を設けるなどと云ふこ

とは、無論俗人の所業で、專門家の眼中に置くべきことではない。先づ卒業生の分布と云つた所で、場所から云へば廣くそれから職業から云へば多くと云ふだけのことに歸するので、大して新しいことも珍しいことも云ふことは出來ないが、併し之に附け加へて、少しく思ひ付いたことを述べて置かうと思ふ。

一體卒業生と云ふ名は、如何にもエラさうに見えるが併し其虚名に付て、餘り多く威張るといふやうなことは、人々がみな避けなければならぬことである、一體人々が學問でなければ到底立身出世の途がないやうに考へて居るのは、大なる誤想である、無論學問も、立身の方法にはなるし、又或度までの學問といふものが、人間の品性を作る上に於て、即ち一人前の人間になる爲めに、是非なければならないが、それは即ち普通學のことであつて、專門の學問、高等の學術といふものは、必ずしも直接に、品性に關係のある譯のものでないのであるから學者だから上等で、無學の商人だから劣等だと云ふやうなことは、決してないのである、寧ろ人に依つては、或度までの普通學的修業を終へて後、實際の職務に馴れて居つた方が、中途半途の學者よりは、餘程エラい點があるかも分らない、要するに專門學といふやうなものは、無論之を利用する事も出來るが、其利用する上から云へば、實際上の職務、即ち商業、工業等に對して、價値の差別がある譯でなく、唯さういふ一面もあるが、其外に學問には、學問夫れ自身の價値があつて、幾分か或意味に於ての、慰み半分、即ち娯樂といふやうな事の方面があるのである。必ずしも、直ぐ實際に役立たぬからと言つて、學問の價値が減ずる譯ではないのである。學問夫れ自身に、一種の價値があるのである、此價値は、決して學問に依つて立身をしやうとか、世を益しやうとか云ふことを考へて居る人には、理解が出來ぬ點であるので、又必ずしも、あらゆる人々が、さういふ學問を脩めなければならぬ必要は、些ともないのである。それであるから、人が何でも學問にばかり向ふと云ふことも、必ずしも賞むべきことでないかも分らない、學問の好きな人、又それに應ずる力量のある人は、學問を修めて行くが宜い、又それで社會上に、夫れ〴〵地位を占めて宜い譯であるが、此學問を修める力量のない人で、是非とも學問を處世の方便にしやうと云ふのは、少しく間違つて居ると謂はなければならぬ。吾々は

其點から所謂苦學生なるもの丶組織に大反對なのである、無論苦を忍んで學問をすると云ふことは、必要であるが、併し所謂苦學生の苦學は、こういふ意味ではない、一方に牛乳配達とか、新聞配達とか云ふことをやりつ丶、傍ら目的たる學問を修めやうと云ふのであるが、何にも其樣な骨を折つて、學問をする必要はないのである。若し牛乳配達をするならば、其牛乳配達を自分の職業として、傍ら學問が好きならば、慰みに學問をやるが宜い譯である、其中に機會が出來て、學問界の人となる事が出來れば、それは別に差支ないのみならず、寧ろ悦ぶべき塲合であるかも知れぬが、併し實業といふものを、全く方法として使つて、是非學問を以て身を立てると云ふやうに、誰も彼れも考へて居ると云ふのは、即ち所謂苦學生は適當なる方法を得て居るものでなからうと思ふ。之れと同じやうに奬學資金といふやうなものが、多くの塲合には、無効なことだらうと思ふ。斯く學問が、必ずしも唯一の立身の方法でないのであるから隨つて其學問を、一通り修めたからと云つて、一廉の手柄をしたやうに考へて居る卒業生があつたならば、それは大なる間違と謂はなければならぬ、此誤想が隨分卒業生の分布上に影響をするものであらうと思ふ、併し實際の塲合に付て考へると、卒業生の得意になるのも、僅の間で學校を出たときには、他に天下の英雄がないと云ふやうな氣慨を有つて居る者でも、忽ちにして自己の無能を悟り、或は悟り過ぎる位で、大に意氣銷沈するといふやうな風になつて來るものであるから、餘り詳しく言ふのも、或は無用かも知れぬが、併し此處で又他の問題が一つ出て來る。

即ちそれは卒業以後の勉學と云ふことである、學校に居る間は、熱心に讀書勉學をした人でも、何か職業を取ると、全くそれを廢するといふやうなものが少くない、それで殊に地方へでも行くとか、又繁劇なる職務を取るといふやうなことになると、書物とマルで縁を絕つて仕舞ふやうな人があるのである、此等の點からして、矢張卒業生の分布といふことが、餘程弊害を受けて居る、是は努めて、卒業生自身が、注意をして脫しなければならぬ弊害であらうと思ふ。併し又是は卒業生ばかり咎めることが出來ないで、一方には社會の補助も大に要する譯である。今日有の樣では、兎角實務を執る者の、勉學を嫌ふ傾きがあつたり、或は社會に種々の學問上の制度が成立つて

居らなかつたりして、志ある人も、便宜を受けることが出來ないやうになることは少くない、例へば邊鄙な村にも、一通りの圖書館を設けるとか、或は種々の交通の便利を利用して、中央との連絡を圖るとか云ふやうなことを、成るたけ努めて、一方には卒業生の分布をして、利益ある効果を得せしめるやうにしなければならぬことであらうと思ふ。斯様にしたならば、一方には益々知識ある人が分布し、又一方には、其分布した識者の知識が始終新になつて行く譯のものであらうと思ふ、是だけの設備は、卒業生の分布を望む所では、是非とも知つて居らなければならぬことだらうと思ふ。

（明治三十七年九月）

男女交際に就て

△交際とは何？――△ヨツ行――△家族會――△交際と戀愛――△青年男女の交際

▲二三氣のついた點　男女交際に就て意見を述べよとのことであるが、此の男女交際は隨分やかましい問題で、數年來種々と議論が鬪はされたが、何人と雖も之れを否定するに確乎たる論據を有して居る者はないので、又有す可き筈も無いのである、それで自分も矢張り多くの人々と同じく、男女交際の必要なる事は充分認めて居るのであるが、さて其の方法は、と申すとさしたる名案も浮んで來ないのであります。結局私自身も此の問題に就ては、經驗家の意見を拜聽したいと思つて居るのでありますが、茲に二三氣の付いた點を述べてみやうかと思ふのであります。

▲交際とは何？　全躰此「交際」といふ語は、頗る意味の漠然たるもの丶やうに思はれる。例へば二個以上の物が相接して相互に影響する事をも「交際」と言ひ得るであらうが、普通に「交際」と言へば餘程派手な、外形的な關係を意味して居る様に思は

れる。「交際社會」とか「交際家」といふやうな言語より我々が聯想し來る處の觀念は、後者のやうなものであらうと思ふ。單に少數の人が相往來して居ると言ふのみでは「交際」といふ觀念は浮んで來ない、其處で交際社會と云へば、先づ園遊會の樣なものを指すので、少なくとも五十人以上の盛裝したる紳士淑女の團躰、若しくは夜會等に於ける舞踏室を聯想し來るのである。斯かる社會の會合であれば、總てが西洋風である處からして規則が嚴重で、曰く高帽、曰く燕尾服、曰く白襟紋付、曰く何、曰へ何と言ふ樣に服裝からして一定し、食事をするにしても上向いては可かず、下向いても可かず、談話をするにも過度に笑てはならず怒てもならずといふ風な八釜しい儀式、習慣が有つて、禮式書の一冊も覗かなければ容易に顏出しも出來ぬ仕末で、平常餘り斯かる派手な事に馴れない學究先生などは眞平御免と尻込みする樣な譯でありますが、尚よく〳〵考へてみれば、此の華美で資力の及ばぬ點は是非も無い事ながら、多少その窮屈であり隨つて品位を嚴肅に保つといふ點は中々面白味の存する處であらうと思はれる。

▲他所行　年中その樣に窮屈な事ばかりでも堪へ切れぬ事であらうが、時々は斯かる規則に束縛せられ、制限せられつゝ快樂を覔むるのも確かに人間の性情に滿足を與ふる事と思はれる。一般に「交際」と言へば先づ以上の如き方面に傾いて居るものと解釋して善いのであるから、「男女交際」も亦かゝる意見に解釋しなければならぬ筈である。單に甲の學校の生徒と乙の女學校の生徒との二三が往復せるが如き、或は親類同士の男女が相談とか打合とかで、度々會合するが如きを稱して男女交際なりとは云へなからう。苟くも男女交際と言へば、多數の、且つ餘り昵近でない一人前の男女が一定の方式の下に會合して、多少更つたる他所行の應對をする會合でなくてはならない。然り交際には他所行きと云ふ事が必然に伴はれて居る樣に思ふが此の他所行きが男同士若しくは女同士のみの場合には、頗る殺風景な單調なものに終るが、其處に異性が交はれば忽ち活氣がついて來る樣である。然し其異性が若し劣等なる階級に屬する者なる時は、他所行きが平常も平常、大胡坐の狀態と壞れてしまふ。他所行きで、そして色合ひが有ると云ふのは如何しても對等の地位を以て男女が交際する場合に限る

と思ふ。即ち、斯かる意味に於て男女交際は必要であるので、一面に於て人々の義禮思想を養成すると同時に、他の一面に於て春風徐ろに吹き渡る樣な中に一種の快樂を得せしむる次第である。

▲家族會――一種の溫味　然らば此の意味に於ける男女交際を、如何の方法に據りて實行すべきかと言ふに至つては實は從來の人々の行つて居る以上に餘り考へた事も無いので、全躰、交際の少ない我々學究には事實上さういふ會合に出かけて行く機會が無いのである。我々の組織せる丁酉倫理會の有志家が幹旋、盡力して昨年來「家族會」なるものを開いた――其記事は當時の（丁酉倫理會）倫理講演集にも出て居る――其の出來映は固より理想的と言ふを得ないけれども、見聞の狹い我れ〳〵の眼からは、今日の處到底彼れ以上の事は六ケ敷いであらうと思ふ。つまるところは男々女々の交際に落は來るが、詳しく言へば、旦那樣は旦那樣同士、相も變らぬ哲學論や藝術論で、口角沫を飛ばして居るし、奥樣は奥樣同士て小さな聲で何か話し合つて居るといふので幕にはなるが、然し如何に武骨一片の我々でも斯樣風に同一の室に集り同一の庭園を散歩する間には何とか挨拶もしやうし談話を交ふる必要も起きて來るのである。素よりそれ以上は中々出來ない、一々御婦人方の機嫌を取て歩く男子も無ければ、おめず臆せず男子の中に割込んでしやべり立てる女子も無いが、唯以上に述べた丈でも所謂一種の溫みと他所行的態度とが多少生じて其の會合の後で滿更徒爾な暇つぶしをしたとは後悔しない。此の禮儀と情合の融合に趣味を持たない人は遂に眞正の意味に於ける男女交際の快樂を享ける事が出來ないであらうと思ふ、故に左樣いふ人は冗談相手の女か、御機嫌取の男を取卷にするより外に道はありますまい。

▲交際と戀愛　斯く言へば忽ち「情合」なる語を拉へ來り、これに一種の意味を附會して、男女の交際に於て戀愛分子の混入は遂に避け得可からざるかと速斷する者が有るかも知れない、無論男女交際が戀愛に誘ひ導くとは有り得る事であるし、又實際往々有ることである、これは恰も對等ならざる社會の男女交際が往々後に眞の意味の戀愛に變更するのと、少しも變らない。然し異性間の情愛が變じて眞の戀愛となつた曉は、最早單に之を稱して交際といふことは出來ないので、其れは又自ら別問題である、

異性間の情愛は、詮じ詰めれば或は一種の戀愛的分子が伏在するかも知れぬが、多數の男女が總てが悉く戀愛の精神を持て居るものとは限られぬのであらうと思ふ。『何某は何となく氣が合つて長く話をして居て見たい樣な氣がする』『四五日會はないと一月も會はぬ樣に思ふ』『某と何の宴會で會ふのが樂みに待たれる』と言ふ樣な單純な感情が變じて戀愛となる事も有るかも知れぬが、非常な殉情的の人でない限りは其れが直ちに戀愛に變形することは有るまい。我々は確かに或る人を愛しつゝ戀せぬことが出來る。男女交際即ち戀愛なりと身慄ひする頑固黨もあるし、戀愛なるが故に極端に戀愛に導けよと言ふ樂天家も有るが、共に事實の眞相を誤れるものであらうと思ふ。男女交際が戀愛の機會を作ることがあるから、彼即ち此であると斷定するのは、尙國際間に道德の無い場合が多いからとて、直ちに國際に道德無しと論斷すると均しく論理上の誤謬である。と言つて私自身は敢て戀愛を罪惡視する譯では無い、唯男女が交際する度每に直ぐ戀愛しては常識上から考へて見ても隨分厄介な事だと思はれるから、其の間には差別が有ると言ふまでゞある。

▲一人前　以上は主として一人前になつた男女を標準にして說いたのであるが、此の「一人前」なる語は至極曖昧な言葉で、尙「交際」なる語の頗る莫然たると同じであつて、學校を卒業したから一人前に成るのか、結婚をしたから一人前に成るのかと種々の疑問も起るであらうと思ふが、勿論貴賤尊卑の別は有るのであるから、「一人前」として滿足する程度が色々ある、從て其權利にも亦等級が有る譯である。兎に角社會より観て社會に對して相等の貢献を爲す事の出來る者、或は獨立自營して居る位の處が「一人前」であらうと思ふ。小官吏でも、會社の末班に位せる者でも、職工でも、車夫でも獨立自營して居れば「一人前」である。獨身でも、被保護者でも、社會に對して文藝其の他の貢献をなしつゝ有れば矢張り「一人前」である。我々は斯くの如き人にして始めて一人前として對等の男女交際をなす資格が有ると思つて居る。飜つて靑年學生の男女交際と言ふことを此の見地からして論ずると、如何にも好都合な結論が出て來さうにもない、何故ならば此の場合に用ゐる「交際」も以前と同じく、單に二三の人の往復、若くは音樂とか美術とか文學とかの研究討議のために多數の男女學生

が會合する事を指すのでは無く、交際の爲めにする交際を意味すること勿論である。

△青年男女の交際　なるほど學生たる青年男女も相會すれば利益の無い事は無い、が、何分にも未だ一人前と言ふことが出來ないからして、其れ等の人々は先づ一人前になる準備にこれ急にして、其れ以上の閑暇が有る可き譯が無い、學生の本分は學術の修養に在る、其れ以外交際などに日を送らば、大事の修養時代を徒費してしまふ譯である、私は敢て交際を惡い事とは言ひもしないし思ひもせぬが、實際上に於て到底出來ない事であらうと思つて居るのである。然し茲に言へるは交際の爲の交際をのみ指せるもので、前に言つた音樂、美術、文學等の研讚の爲めに男女が會合するか、或は從兄弟同士又其の友達などが自然往來する等は、必要上若しくは自然に起る事であるから、是非をさしはさむ可き限りでない。こんなことを稱して學生の交際と言ふは、稍名の付け方が惡いので、これは只必要なる手段として交際を行ふに過ぎないのであるから、如何に禁止して見た處で仕方がない話で、教育家が千言萬語しても何の効能も無い處である。唯此の場合に弊害が起るか否かは、無責任なる樂天家は考へもしまいが、教育家や父兄の方より言へば隨分懸念に堪えない事もあらう、例へば其の交際が遂に戀愛に導くか否かと言ふことは考量すべき問題であるが、我々は事實として其を否定する事が出來ない、然かも其の戀愛が固定的であれば善いが、所謂一時の情火で、浮いた戀になつてしまふ事も有るから、本人は如何か知らぬが、教育家や父兄から言へば隨分憂慮に堪へない譯であらう。さればとて今日の社會に於ては、或る目的のために男女が相會合する事は避く可からざる事であるから、一概に頑固論を立つるは時代後れで有ると思ふから、如何しても各學生の人格を養成し、理性を發達せしめ、一時の感情のために終生の大事を過つが如き事のない範圍内にて「ロマンチック」の空想にも耽らせ、趣味をも廣めせしむると共に、一方には無益なる交際のための交際を止むるより外に方法は無いであらうと思ふ。

先づ男女交際に關して思ひ付たことは此れ位のもので、頗る平凡で且つ要するに出來ない相談も有るかも知れないが、氣樂な囈語を喜ぶか、頑迷固陋な意見を懷かない限りは、此の道より外には無いであらうと思ふ。（明治三十九年三月）

家庭と事業

近頃大分家庭問題が人々の口端に上る様になりましたが、一方にはやはり往時の豪傑肌で、大丈夫何ぞ區々たる家事を論ずるに遑あらんと廣言して居るものもあります。無論是等の廣言家中には、一方では全く家族と他人と又自己との、人格を毀損する様な所業をして平然として居るものが多いので、是等は全く新時代の新理想を解せぬものと擯斥し去つてよいのですが、併し又家庭問題に屈托すると、遂に自己の職業とか天分とかを、充分に思ひきつて盡すことが出來ぬと云ふ意見にも、強ち全く取り所がないとも言ひきることが出來ぬ様にも思はれます。「家庭と事業」此問題は多少深く考へて置く必要はないでもありますまい。

或る人は家庭を以て、夫たり父たる者の慰藉娯樂の場所と考へて居ます。此考には一面の眞理はあるが、併し解釋次第では甚だしき我儘な、人格を無視したこと、言はねばなりませぬ。成程、人々が外に出て勞働して居る時には、隨分腹の立つ事もあ

らうし、又氣のゆるせぬことも多くて、所謂闘を跨いだら敵の中と思へと云ふのも、多少の事實であらうから、終日此中に健闘した者が、家へ歸つて妻子眷族のやさしい待遇を受けるのは、非常な慰藉になるに違ひはない。然し是では妻子家族は、たゞ其主人公の娯樂の道具になつてしまつて、殆ど獨立の價値を認められないことになつてしまひます。斯様な家庭であると、隨分之に勝つた娯樂慰藉を與へる場所が他にあつた際に、容易に見代へられるやうになるのも、當然な次第と言はねばならぬでしやう。其故に家庭は、單に主人公の鬱を散ずる酒食の如きものでなく、其以上に更に高尙な意義を有つて居らねばならぬと思ひます。と云ふのは、家庭の中心たる者は、無論主人であるから、主人を慰藉して安んじて其業に努めしめる様にするのは、當然の事でありますが、然し其慰藉は、單に宿屋の女中が旅客を遇する様な遣り方ではいかず、又主人の方も、旅客或は旦那の様な態度で居るのもよくない、即ち其處に一種特別の關係が、双方の間に成立つて居なければならぬ。而して此關係を生せしむるものは、兩者の間に同情の存することに外ならぬと思ふのであります。

　所で其同情と云ふ事に二様の方面があつて、其一方を缺くと、家庭と事業との間に衝突を生ずる様になるかと思はれます。一體家庭が圓滿でないと其が爲に主人公の氣を腐らせる様な事になり、樂し過ぎるとつひうか〳〵と其日を送ると云ふ様な事は、必ずしも世間に少なくない事實であります。所謂樂しい家庭と云ふのは、夫婦親子の愛情が濃厚で親密で、相互の間に充分同情の存在して居るのを云ふので、此家庭に於てこそ初めて苦樂を頒つことが出來るので、眞の慰藉、眞の對等的娯樂を生ずる事が出來て、主人のみが權力を振つて、他を從屬して娯樂を享受する様なことにならなくなるのです。主人は一日の務を果して勞れ果てゝ役所から歸ると、主婦は何か似合しい料理をして待つて居る、子供は騷ぎ廻る、ほめられもすれば叱られもする、唱歌をうたふ、喧嘩する、泣く、笑ふ、と云ふ様な所に一種の趣味があつて、眞に樂々とした生活を味ふヿが出來るでしやう。私は先日迄左る事情の爲に、殆ど一年間夜まで日々他に居つて、晩餐を自分の家でする機會がありませなんだが、其間は餘程自分の家に對して冷淡になつた事がある様に思つて居ます。所が社會に立つて何が職業をする上は、斯様な事は決して珍らしからぬヿであるから、どうも是非晩餐は一家團欒してせねばならぬといふ譯にもゆかなくなります。是は極めて些細な一例であるが、斯様に家庭間に同情が深くなると、反つて社會の事業を妨害する、と云ふ様な結果を生ずることもあるとしますれば、家庭が昔風の專制主義を脱して、同情の團體となるばかりでも、まだ社會的生活をなす上には、缺點がある様に考へられます。さればとて昔風にはありたくもない、然らば家庭は如何したらよからうか、殊に家庭を組立てるに當つて、最も働くべき主婦は如何したらよいでありませうか。

　此處で、所謂家庭間の同情の他方面を見なければならぬと思ひます。前に同情に二方面があると申しましたが、今迄述べたのは其感情の上から見た同情で、親子夫婦が其愛情の上から同じく樂み、同じく喜ぶと云ふ意味の同情です。然るに同情には、又知力の點から生ずるものもありまして、家庭の各員が其日々爲す事業に就いて、互によく理會し、其間に存する苦心を察し、其より生じた良好の結果を喜ぶヿが出來る様になるのもあります。例へば寺子屋の武部源藏が、屈托顏で歸つて來ると、女房が心

配して其理由を尋ねる、源藏が一伍一什を物語る、之れで「鬼に成つてと夫婦は突立ち、互に顔を見合せて……妻が歎けば夫も目をすり、すまじき者は宮仕へ、と共に涙にくれ居たる」となれば、家庭に知力的同情があるが、大功記十段目の武智光秀の如く、「女わらべの知る所ならず」と一喝し去つては、此同情の起る餘地がない。此知力的同情が家庭に存在すれば、夫は其職業に全力を盡して、然も其妻から渾身の同情を受けることが出來るでしやう。それでないと、夫が社會的事業に奔走するのも、書齋に籠つて研究するのも、妻子は殆ど痛痒相感せざる如き者となるのであります。ハウプトマンと云ふ人の戯曲に、「寂しき人々」とでも譯したらよからうと思はれるものがあるが、其夫は若い學者で、連りに論文を書くので苦心して居る。細君は温順貞淑であるが、一向夫の苦心には同情が出來ぬ、御互離れ〳〵のさびしい生活を送つて居ると云ふ筋ですが、知力的同情が家庭に必要なることは、之でも判ると思ひます。もし知力的同情、即ち家庭間に相互其氣質、職業等を理會することから、同情を生ずる機會がなかつたら、單に感情上の同情のみになつて、所謂愛に溺れることになるか、或は主人獨り猛威を奮つて、家庭を娯樂所か休息所とする樣な狀態になると思ふのです。勿論知力上のみでは、温かい所がないので、なまじひ家政學とか何とかに拘泥する新家庭が、往々不滿足を生ずるのも、或は此のみに偏するかも知れぬから、一方に感情上の同情は必要不可缺、又自然存在するものであるが、之を知力で指圖して、旨目的たらしめざる上に相互理會すると云ふ事が必要であると思ひます。

此點から私は、今日多數の教育家の意見に反對して、女子にも高等教育の必要なることを主張したいのです。強ち女子獨立のためとは言はず、實に良妻賢母になるのにも、夫や子の事業に同情し得る程度には、是非教育の度を進めなければならぬと思ひます。先日ブライアン氏の演説を聞きましたが、米國公使が其紹介中に、ブライアン氏の夫人は氏を輔助するために、自ら法律學を修めた程、氏に對して盡して居たと言はれましたが、ブライアン氏も亦之を承認されました、而して之を聽聞した私共は、家庭が此程度まで進まなければならぬと感じました。

此問題は、獨り結婚しない女子の學校教育にのみ關係した事ではないので、實に一

家の主婦たる者にも、注文せねばならぬ事であります。それには今日の家庭組織に就ても種々缺點があり、衣食住の方法が不完全で、餘計な閑潰しが多かつたり、交際往來が面倒で、知識擴充の便利がなかつたりする點もありませうが、然し心掛け一つで、多少此困難に打勝つことも出來ぬではありますまい、現に私の亡友の夫人などに、多年廢して居た學業を未亡人となつてから、自立のために修めて居られる人がありますが、もし看病・家事の多忙に壓服されてのみ居たならば、中々其樣な發心は出來ますまい。故に私は、一方に於ては女子が未婚と既婚とを問はず、自己の修養獨立等の爲の外に、母妻となつて知力的同情を注ぎ得る準備を怠つてはならぬと思ひます。然し無論一面には、社會の各方面が之を阻害せず、之に便利を與へる樣になつて居らねばならぬのです。家庭と社會とが、此程度まで進みましたら、家庭と事業との問題は、事實的に解釋せられるのではありませんか。良妻賢母主義、必ずしも惡いのではありませんが、其裏面には女子の人格を卑下して、昔風の三從七去主義を含蓄し、結局眞の良妻賢母を生せず、何時までも家庭と事業とを兩立しない事柄にして置くのは、望ましからぬ次第ではありますまいか。（明治三十七年十二月）

女子問題二則

一、女子教育雜感

私は從來女子教育などに毫も經驗がないので、到底根據のある實際的な議論をするなどは出來ますまいが、或一個の男子が其異性に對する要求希望といふものを述べるとしたら、強ち僭越な事もないではありますまいか、尤とも私の申上ぐることは、一方の側面を主として居りますから、一般論者や、女子教育家の意見などゝも異つて居るかも知れませぬ、そこは所謂他山の石で、とにかくかゝる意見を有つて居る者もあると云ふ事を認められんことを望むのです。

女子教育に關しては言ふべきことが種々ありますが、先づ私の注意を惹いて居るのは、所謂良妻賢母主義です、社會全體の上からいへば、男女は夫婦となり、親子とな

るのは最も普通の現象で、又一般に言へば實際然かあるべき筈で、若し此事がなくなつたら、忽ち社會の基礎が崩れて仕舞ふ筈でしやう、女子の將來が良妻賢母となれかしとは、女兒を有つた親達の自然に願ふ所でもありましやうから女學校などで之を第一に說くのは、當然な事とも考へられます、然し此處に注意すべきことは、第一に正當な事でも場所を擇ばず說く可きものとは言へぬ事と、第二に正當な事でも或る特別の例外があることを忘れてならぬ事です。

第一に、良妻賢母主義は女子の將來に於て、最も正當な運命を支配する者であるとした所で、學校の敎育上に之を打明けなければならぬか如何か、が問題だらうと思ふ、近頃では高等女學校の最上級が大體十七八歲でしようが、學校敎場で無邪氣な學問技藝に身を委ねて、浮世の苦しみは知らず貌であるべき筈の花の如き少女が、家を持つたら如何の、夫に事へるのは如何のなどと敎はると云ふのは、抑も可笑しな譯であります、此學問も家を持つて、此樣に應用しやう、此技藝も、良人を慰める方便となるだらうなど、何時でも思はなければならぬとは、女學校生活も、亦頗る厄介な者と言はなければならぬ、畢竟今日の世の中では、一般社會の智識が、高まつたと共に、今迄は寺小屋或は小學校だけで可かつたものが、一歩高まつて、高等女學校丈の敎育を要する樣になつたので、一般の女子が良妻賢母となるべき運命を有つて居るものなら、特別に其樣な事を言はなくても宜さゝうなものです、然し、或は女子の學問は、男子のと異つて、結局家庭に應用し得る範圍に止むべきものであるから、其れを豫めよく敎育者と被敎育者との頭腦の中へ浸み込ませる必要があると云ふのかも知れぬ、是に於いてか、第二の點を考察する必要があります。

第二に、一般女子は、成程家庭の女王となるものでしやうが、如何なる女子も是非さうなければならぬと云ふ理由はない、文學や、美術や、學問其他萬事につけて、女のみが必ずしも關係するとの出來ぬと云ふ理由はなく、又そんなに普通の生活を送ることの出來ぬのを一概に避ける理由もないと思ふ、或人は女子の生活は、かゝる修業に適せぬと云ふが、之れは所謂良妻賢母に拘泥するからで、其の生活を擇ばなければ、必ずしも難事ではない、又或人は、女子の能力から之を非難するが、成程從來多數の

女子は比較的卓越の事業を擧げなかつたかも知れぬが、今後出來ぬと斷言することは速斷である、男子だとて、天才の人は極めて少數に過ぎぬのに、女子にのみ責むるは酷だと思ふ、故に一般の女子が普通の良妻賢母となること、なほ一般の男子が、良夫賢父となる如くにしても、學藝其他の事業に一身を捧げる人が、男女ともあつたからとて驚くに足らぬ、之れを養成する學校があつたとて、彼是非難するのは間違ひだらうと思ふのです。

然し要するに、かゝる論議は末の事で、全體學藝に從事したからとて、必ずしも良妻賢母になれぬと云ふ譯は無い、究竟は、問題は本にあるので、今日敎育に此主義を主張し雷同するのは、一方に女子の人格を認めざる譯ではないか。人格を養成した上は、人々所として可ならざるはなしで、家庭に在つては、自から良妻賢母になれる譯である、又其の人格を尊重する上は、人々の自然の性情を形式的主義で拘束する譯はないのである、人格を修養することを怠つて、彼是末を論じたとて、殆んど効能はない譯です。

其の人格を尊重しない一例は、今日の學校寄宿制に顯はれて居ます、今日の學校は恰かも生徒を以て罪惡を犯すものと看做して居る樣です、敎育に從事するものをも其調子で束縛して置いて、すぐ良妻賢母の養成に從事させると云ふのは、殆んど滑稽に類したことではありますまいか、勿論束縛は一方の弊を抑壓することが出來るかも知れませぬが、全くの罪人扱ひは反つて若い人の煩悶を增す許りです、全體學校の敎課が、そんなにしなければ、覺えられぬものでしやうか、或はそれほど萬能なものか、そこから疑問が起る譯です。

とにかく、良妻賢母主義や、束縛主義は、一般に言はゞ間違ひがない主義ですが、決して根本の主義ではないから、或特別の塲合、特別の人に當はまるもので、之を一般に持て行くと隨分無理が起り、其の無理の爲めに苦しむものも出來る譯です、敎育家が、一般の主義を立てるには、是非一般的根本的のものを尋ねて行かねばならぬ理が、此處にも顯れて居るので、其の根本的主義を守れば、後は適宜に自由を許し活用をしなければならぬことになると思ふのです、其の根本主義は私の言葉では、人格の

修養及尊重と云ふ事に過ぎぬのです、之を離れて、或は家庭だとか、或は墮落だとか言つた所で、何にもならぬ事ではありますまいか、然らば人格の修養及尊重とは何かとは詳しく論ずるを要する事でしやうが、此點に關する私の所見は固よりまだ未熟ですが、多少他にも一般問題として述べた事もあるし、今後機を得て、追々申述べる事もありませう、目下非常に忙しいので、此位で暫く筆を留めて置きます。(明治三十八年五月)

女子問題雜感

女子問題と一口にいふも、教育問題もあるべく、職業問題あるべく、家庭問題もあるべく、或は權利の問題もあるべく之を包括して女子問題とはいふなり、往時にありては、女子は社會の表面に現はれざりしを以て女子問題もなかりしが、近時に至りて女學發達し、人生問題を論じて哲學者を凹ませる女學生などあるに至りたり、おしなべて女子問題といへば、女子を攻撃する傾きあり、西洋にても女子を攻撃する頗る多きが、斯くの如きは女子を論ずる者が多く男子なれば也、人間は我儘なものにて兎角自分に都合よき事をいふ、女子問題も男子にありて爲さるればこそ攻撃も多けれ、若し女子によりて男子問題を論せらるゝ場合には男子もやがて攻撃を脫かれざるべし。

▲女子問題を論ずるもの多くは女子を全く別なものと考ふるが如し、職業問題といへば男女のそれを含む譯なるに普通には男子のみを意味し、女子のそれを論ずる時は特に女子といふ制限的言辭を附するなり、斯の如きは女子を厄介視するか、又は之を丁寧に取扱ふか二者何れなりとするも、之が爲め女子問題の解決に少なからざる故障を見る、即ち男子の女子を攻擊するもの多きは男女の意思疎通せざればなり、されば女子は男子の攻擊を恐るべき理由なし、寧ろ進んで其の眞情を披瀝し其眞相を發揮するに勉むべきのみ、余は次に女子問題を解決する心懸を述べんと欲す。

▲第一女子に同情なかるべからず、論者が多く女子の攻擊を事とするは、やがて女子に同情なき明證にあらずや、斯かる論者は僅に其の接觸する二三の女子を以て其の全體なりとし、口穢なく之を罵るなり、若し女子に同情を以て論ずる時は其の見地更に透徹するものあらんなり。

▲第二現在並に過去に於ける女子の狀態を知らざるべからず或は一時の現象によりて或は西洋の一文書によりて女子問題を解決する材料とするがそも〳〵間違の始なりと知るべし。

▲元來東洋にては西洋に比して男女貞操の程度異れり、西洋にてはいふ迄もなく女子の貞操を貴ぶも更に男子の貞操を矢釜しくいふ風あり、我國にては女子の貞操は盛に之を嚴にするも男子に至りては措いて問はざるなり、昔より大豪傑にして男女の關係みだらなものも、之が爲に、非難されし例あらず、之に比すれば近時ゴルキーが、女優を携へし故によりて米國に受けたる待遇の如きは如何に男子の貞操に對する社會制裁の嚴なるかを示すものといふべきなり。

▲日本にては放蕩なるは却て男の働きなるが如く思はれ、奥樣それ自身さへ之を怪まざるなり、況んや其他をや、佛國の貴族の如きは夫婦もろ共に不品行を行ふもの多し主人も遊べは夫人も遊び、斯くして双方不品行を默認しつゝあるを以て夫婦とは名のみ、羨むべきことにあらざるも斯してこそ公平なるべけれ、日本にては獨り女子のみの貞操を矢釜しくするは男の得手勝手にあらずや。

▲女學生腐敗といふこと世に唱へらるゝも、實は大袈裟過ぎるなり、男學生はより多く腐敗しつゝあるにあらずや、余は腐敗女學生の存在するを疑はざるも健全なるもの猶多きを信ずるなり、乃ち我國にありては女子の貞操は餘り之を論ぜざるも可なり、女子も男子の批難に凹むべからず、寧ろゴルキーを追出す位の意氣なかる可らず、要するに女子問題を論ぜんとする男子はモ少し見地を廣め其の當面の事象によりて輕斷を下すことなく、過去現在に亘つて之を研究せざるべからず。

▲第三女子の性質即ち婦人の心理を知らざるべからず、心理學を知るも猶之れのみにては不可なり、實際多くの婦人に接して鋭敏なる觀察眼と精覈なる判斷力を以て研究するを要するなり、人間は複雑なるものにて中々理窟一ペンにて分らざるなり。同じ女學生の同じ年輩の同じ廂髪の同じ温和しさうな顔してゐる者にても、實は案外アバズレなるものあれば老成ぶりたるものありねんねいなるものあり、殊に注意すべきは男らしき女と女らしき女とあり、之れ倘男子に男らしき男子と男らしからざる男子と

あるが如し、音樂家詩人文學者の如きは多く女らしき性格を有するものにあらずや、乃ち女子にありても女らしからざる女とて必ずしも咎むべきにあらざるべし、斯くの如き女子は其方面に發達するこそよけれ、要するに女子の研究決して容易にあらざるを知るべし。

▲男子より女子を見れば要するに女子は女子にして男子あらず、男子を補ふべきものと見るの外にあらざるべし、男女相合して此に完人となるなり、是に於てか、男女は原則として結婚せざるべからず

▲思ふに我國の習俗程結婚制度の亂暴なるはあらざるべし、嫁を貰ふは恰も道具を買ふと異る觀念を有せざるが如し、父母旣に斯の如く而して其の夫とするもの亦然りとせば女子の人格は全く認められざるものといふべし。

▲然らば自由結婚は如何といふに之れ亦安全なる方法といふを得ず、人間は目先の見えぬものなり、ハッと思ふ刹那の感によつて好惡の情を生ずるものなれば、其判斷の正鵠を失ふもの多きは怪むに足らざるなり、即ち昨日迄は宜かりしが今日はイヤになるなどの例もなきにあらず、自由結婚を爲せる夫婦は必ずしも理想的家庭を實現するものにあらざるなり。

▲要するに何れにしてもまぐれ當りなり、當るも八卦當らぬも八卦といふの外あらず斯くいへば結婚とは誠に危險なる事柄なれども斯の如きは脫かれざる所なれば之に順應し利用するの心懸を要するなり、即ちアキラメが肝腎なり、自分の亭主は下らぬ人間なれど致方なしアキラメて家政をよく處理すれば今月はいくら餘つたといふやうな鹽梅にてその內には好運の見舞はざるとも限らざるべし、つまり男女は補者としての考を持たざるべからず、煩悶あらば煩悶するがよし、死に度くば死ぬも妨げず、斯かるものは中々度し難きものなり、然らざる以上例へ不如意なりとてアキラムルが處世の要訣なり。

▲即ち入らざる不平煩悶を止めて餘り權利の問題などに口を出さざるがよからん、世が進めばその中には男子も追々女子の權利を認むるに至るべし、併し男はズルク構へて女子に權利を分つを吝むものなれば折々催促するなどはよからん。

▲要するにアキラメといふことは結局修養といふことに歸着するなり、而して敎育主義として世は所謂賢母良妻主義といふを取る、余は此主義に反對するものならざるも、餘り賢母良妻主義を言ひ立てるは贊成されず、固より惡母愚妻にては困りものなるも稱して賢母良妻といふ中にも色々の意味が含まるゝなり。

▲極めて俗的なる見解に從へば賢母良妻とは只一意男子に服從するものを意味するが如し、斯かる意味の賢母良妻は男子に取りて誠に都合よき話なれど女子に取りては迷惑を極むるにあらずや、東洋にて三從七去といふ語あるは諸君の知る如し、若し三從七去的思想を以て所謂賢母良妻を說くに至つては余は斷じて反對を唱へざるを得ず。

▲且つ家庭向といふを理想としての女子敎育は稍欠くる所なからずや、一般には固より斯くあらざるべからずといへども、男性的分子多き女子に取りては家庭は必ずしも其の唯一の舞臺にあらざるべし、一般の原則として女子の賢母良妻たるを望むべきも例外としては其の獨自生活を容認せざるべからず、是に於てか賢母良妻主義以外に專門學を授くる學校を要することゝなるなり。

▲賢母良妻主義なりとて、男子に都合よき意味のみに解するは不可なり、更に廣き見地に於ての賢母良妻主義ならざるべからず、そも〳〵或一人の女子は或一人の男子と結婚せざるを得ず、女子全躰は要するに男子全躰の補佐者なり、中には獨自生活を爲すものあらんも、幵は或一人の男子の妻たらざるのみ、或意味に於ては猶男子全躰の妻たらざるを得ず、即ち彼女は「婦女子」として男子を補佐するものなればなり。

▲男子にても學者などに獨自生活を爲せるもの少からず、斯の如き人は或者の父たり夫たらざるも女子全躰の父たり夫たるの働きを爲しつゝあるものなり、女子も之と同じ道理にて若し繪畫とか音樂とか其他の文學技藝には天才を有するものは必ずしも人の妻たるに及ばざるべし、斯の如き女子は專門敎育を受くるに何の妨げなかるべし。

▲我國の社會には女子は學問など入らぬものなりとの極めて卑俗なる思想行はるゝ如し、斯の如きは俗人のみにあらずして往々學者敎育家中に抱かるゝ見解なり、余は斯の如き言を以て男子の卑怯に出づるものなりといはんと欲す、即ち自身に確かなる學問なきを以て女子の學問するを恐るゝものにあらずして何ぞや、若し自身に學問ありさ

へすれば、女子にして如何に高等教育を受くとも意とするに足らざるべし、女子の學問などいはゞ知れたものなり、男子にして眞にエラからば女子にして多少の學問せし爲めに生意氣なる能はざらしむるを得べし。

▲人間も未開の頃は男女の區別殆どなし、勞働者の妻君が亭主の引く車の後押をする如く、女子にても力業とて男に負けずにやるなり、されど男女は其の發達に伴ふて其の區別截然たるに至るなり、女學生には車の後押も出來ず、鋤を擔ぐことが出來ず、勿論兵隊にはなれず、女子の仕事は決して男子の領域を侵す能はざるなり、男子は女子に比すればやゝ廣きも去りとて男子に不可能なこともなきにあらざるなり。

▲一般には表面に活動するは男子の職能にして裏面に働くは女子の本分なるが如しといへども、女子が表面に活動するも惡しきにはあらざるべし、只女子は嫁する時は中々社會に活動するの餘裕あるものにあらず、されど行く〳〵は社會の進歩につれて家庭の狀態も改まらば、女子の社會に活動するの時なきを保せざるべし。

▲余は飽く迄女子の教育を必要とするを以て出來るだけ其の程度を高めんと欲するなり、昔は女子は小學校卒業位にて十分なりとせられしが今日にては高等女學校若くは其の程度の學校を卒業せざる女子は殆ど一人前ならざる如く感ぜらるゝが如し。

▲今日の社會にては教育なき女子は良妻賢母となる能はざる塲合なきにあらず、例へば女子にして學校教師若くは學者等に嫁する時は學問の素養なければ學問を事とする夫に同情するを得ず、只從順許りにて其の職業等に同情なき妻君は夫に取りて一向齒堪へがなく、遂に圓滿なる家庭を形作る能はざるなり。

▲獨逸の或脚本は此の種の家庭を描きたり、主人は少壯の學士にして方に或研究に浮身を窶しつゝあり、然るに其妻は左程教育もなく、只溫順にしてよく夫に事ふるも夫婦中兎角面白からず、主人は主人の勝手、妻は妻の自由、己がじしに振舞ひ居りしが夫が大論文を起草しつゝあるにも遠慮せず小使が足らんといふやうな煩はしき家政上の話を持ち掛けしとて、臺所と留守部屋が獨逸の女を動きの取れぬやうにしたりなどと主人は罵る、妻は書物許り讀み居りては家は立ち行かぬと言ひ返すといふが如き有様なりしに偶々瑞西より來れる女學生家に客となりしが、主人も此女とは話が合ひ、

一旦舊知の如く親みて猶更妻を顧みざるに至れり、爰に家庭の不和を慮りて主人の親たる人は女學生を此家より出すことゝなりしが、之が爲め主人は池に投身し、其の妻はヒステリーとなりしといふ悲慘なる筋なり。

▲斯の如き現象は未だ日本に見るべからざる所なるも、早晩此の種の家庭なしとは限らざるべし、要するに妻としては夫の學問職業に同情なかるべからず、夫の學問職業に同情するには少くとも之を理解するの頭腦なかるべからず。

▲女子は如何なる職業の夫に嫁するやも知れざるを以て、廣く何にても分るやうに敎育せられざるべからず、我國にて軍人の妻は比較的能く夫を理解するが如し、其の何所隊附といふが如きことも知り居るなり、然れども他の官吏等の妻君に至りては夫が如何なる仕事を官廳に爲し居るや一向知らぬもの多きなり、之れにてはいかぬなり、されば女子は何にても廣く社會を知り、智力の點より如何なる職業の夫に對しても同情あるだけの素養なかるべからず、即ち淺きも廣きを要するなり、淺きを要するにあらざるも廣き故に勢淺からざるを得ざるなり、專門敎育は別として普通には此意味に於ける普通敎育が必要なりといふべし。

▲或場合に於て法律家の妻にして餘り深く法律の智識あるが如き場合は却て幸福なる家庭を形作るを妨ぐるなり、法律問題に毎日議論を鬪す如きは餘り感服せられざるべし、又哲學者の妻にしても人生問題などを擔ぎ出して夫に議論を吹き掛ける如きことにては家庭は討論會となつて了ふなり。

▲獨逸の小說に又此の種の家庭を描けり、夫も學者、妻も學者、乃で二人は毎日各其書齋に入りて讀書硏究を事とし、其の顏を合せるは食事の際のみ、斯くて殺風景なる家庭を現じつゝありしが、主人は遂に無學の田舍少女を愛するに至りたりと云ふ筋なりし。

▲斯の如きは女學の弊には相違なきも、日本にては中々斯の程度に發達し居らざるなりいかに學問ある女子にても未だ男子に盾つく位の見識あることなく、先づ知れたるものなり、されど家政學などに達し居る婦人ありて往々主人を凹ませるものある樣なり、家政學もいゝ加減にせざれば、却て其弊を見る、妻が註文する通りに家具を完備

するには主人は其の必要なる支出を略かざるを得ざるの奇觀あらば、家政學も困つたものならずや。

▲されど、家政學にて女教師になるものなどは話が別なり、余は一般の場合をいふなり、即ち女の學問は淺けれども廣く、新聞を讀みても何にても分ると云ふ位にならざるべからず。近時或は女子の頻りに男子の職業の範圍を侵すを責むるものあるも斯の如きは働きのなき男子にして口にするを得べきのみ。

▲要するに今日にありては男女兩性の意思疎通せず双方誤解を脱かれざるが如し、或は女學生の煩悶を口にするを攻擊し或は其の出過ぎるを咎むるも之に由るなり、女學生にても煩悶するに不思議はなきにあらずや、出過ぎる女子は之れ男性的分子多きが故のみ怪むべきにあらざるべし、只女子を可成其の範圍を脫出せざるを意とすべきのみ。（明治三十九年七月）

附錄

故蟹江君を憶ふ

歲月の流るゝ速しとは常に繰返されて居る言であるが、我親友の蟹江博士が歿してから既に早く一年に垂んとするに至つたのを見て、今更ながら其感を深くする譯である。其一年の間に自分は故人の爲めに種々盡すべき事がありながら一向未だ果して無く、故人の爲に募つた教育資金も未だ完了せず、遺稿を編纂したいといふ念がありながら種々の事に取紛れて一向其端緒だも擧げる事が出來て居らない。實に故人に對して謝すべき言葉も無い譯であるが、今度の一周年に際して丁酉倫理會の雜誌で再び亡友の事を述べて聊か其紀念として、一は自ら舊を偲ぶの料としやうと思ふ。

自分が蟹江君と交際をし始めたのは明治二十四年第一高等中學校に在學中、君が金澤の高等中學校から轉學して來たのに始つたのである。其の以前の事は自分は詳しく

は知らないので蟹江君から多少聞き又蟹江君の竹馬の友の南日氏から聞いた事などもあるのに止つて居るが、先づ大躰を言へば君は少時から明快なる頭腦を持つて居ると人に認められて居つた樣に見へる。第一高等中學校に來られてから始の間別に左程人々の注意を惹くやうな事も無く稍々都會慣れぬ爲に寄宿舍に生活して居る間に多少頓珍漢な失錯などをして居つたやうな場合もあるやうである。詰り此の時代には君は格別深く交際を求めず、獨り自分の好む所の學問をして居つたやうに見へる。唯々此の頃から有名であつたのは碁が非常に强かつたといふ事である、寄宿舍の娯樂室では折々其の技倆を振つたので、同級以外の人々が蟹江君を知つて居るのは多くは其の點に依つて居るやうである。又其頃は君は學科の外に和歌を非常に好んで居つたやうに見へる、殊に桂園派の和歌を非常に愛して自ら桂園一枝を筆寫して持つて居られたかと思ふ。それに關して何か景樹の歌と眞淵の歌などを比較して短い論文を學校の校友會雑誌に出して居つたやうに覺えて居る。其他の事に付ては餘り格別注意を惹かなかつた、又自分も舊來の知己が澤山あるので自然新入の蟹江君とは餘り深く交はることもなかつたが、其の後一年立つてから卒業が段々近くなつた頃に或友人（山本安之助君と覺えて居る）と共に我輩の家に訪問されて、それから始終其友人等と共に屢々往復して居つた。其時の話は色々あつたが、當時學んで居つた倫理學や文學上の談話などが多かつたのである。蟹江君は其頃から次第に外國文學の研究に心を傾けて同時に美術に對して趣味を養ふことを努めて居られたので、それらの點に付て自分も多少意見を述べて或は又蟹江君の議論などを評して、互に會すれば必ず晝から夜遲くまで話すといふやうな有樣であつた。其の際蟹江君は多少西洋の音樂を味つて學んで居つた樣であるが併し是は到底物になる程ではなかつたのである、其他に君は琴が少し彈けるので夏の休暇に或師匠に就いて琴などを學んだこともあつたのである。

斯樣にして文學、哲學、美術等の方面に非常に趣味を持つて居つたが、併し自分の專門の學科として擇んだところは元來國史であつたので、即ち從來の史學家は眞の日本の歴史といふものを著はして居らないから一つ其の方面に行つて眞の歴史なるものを日本の社會に供したいといふ抱負があつたやうである。專門學科は此の如く決めて

居つたが、併し一方に於ては哲學、文學等の問題に非常に興味を深く感じて來ると共に直接に自己に對する疑問が此間非常に盛んに起つて來たのである。倘それは後に改めて言はうと思ふが、當時我々の所に集つて話をする時には、キット其題目は人生の目的とか、或は理想とか、從來の倫理の不完全なる事とか、總て社會は虚僞で充ちて居るとか、或は懺悔は果して罪を救ふに足るものであるか、自殺が何故してならぬものであるかといふやうなさう云ふ問題が屢々起つて居つた。自分は元來懷疑的傾向を持つて居つたが、併し蟠江君の議論は何時でも極端で同時に非常な熱誠を持つて居るので、若し其説に贊成をしたならば眞に自殺をし兼ねまじき有樣であつたので、自分は又何となしに自殺を實行することのやうな考になり得なかつたものであるから、怪しげな論法で終始反對を試みて居つたが、蟠江君も固より故なく自殺をするといふ風な人でもなかつたのである。兎に角其頃は蟠江君に取つては非常な破壞の時代であつたのである。斯樣にして自分の疑問が段々深くなり同時に專攻科目は初から定まつて居るので、多少其方へ傾いて調べたものもあるので愈々高等中學校を卒業して大學に這入る際に非常な煩悶を起して居つた。即ち自分の本來の目的を飽くまでも仕遂げやうか、それとも自分の嗜好に傾いて行かうかといふので、其夏卒業後國へ歸る時分には未だ極めずに行かれたのであつた。其中に郷里即ち富山から手紙を送つてトウ〳〵自分は哲學の方を側らの學問として國史を專門科目にしやうと極めたといふ事を知らせて來られた。其手紙の中に確か「年來の情人は遉がに見捨て難く」とかいふ文句があつたかと覺えて居る。此の如くして兎に角一時は國史科の方へ這入つたので、大學に入つてから後に、東鑑などに就て大に氣焔などを聞いたこともあつたが、側ら若干の時間を割いて始終哲學の書を讀んで居られた。所が次第に哲學の方の問題が深く感興を惹起し、それのみならず自己の疑問がどうしても先づ解決しなければならぬといふやうな事になつて來たので、遂に國史の研究をして居る暇が無いやうになつて來て、始終煩悶の末、遂に一年の休學をして哲學科の方に轉じたのである。此の如くして我々はそれ迄は同級生であつたのが蟠江君は一年下の級になるやうな譯になつた。斯樣にして三年の間哲學を窮め、卒業後は種々の業務に就いて遂に倫理學殊に東洋倫理の

研究に於て一家を成すに至つた次第であるが、それらの點は屢々自分も書いたものがあるから今此處で詳しく繰返す必要も無いと思ふ。（拙著『時代と哲學』中に揭げた君の小傳談道錄等を參照せられたい）

さて此蟹江の一生は哲學倫理學の研究を以て終始して居るものであるが、其研究の方法はどんな風に變つて行つたか、又其研究した結果蟹江君の懷抱して居つた思想は如何なる變遷を遂げて居るかといふことを見たならば蟹江君の學者としての生活を明かにする事が出來ると思ふ、我々は暫く其點の觀察に移つて見やうと思ふ。

先づ蟹江君の研究の變遷を見ると其間に多少の方法性質等に於て變化が認められて居る。蟹江君が哲學の研究に心を向けた第一の動機は自己に關する疑問であつたのである。即ち自分は非常な罪の多い者であるが其罪は果して懺悔に依つて償ふ事が出來るものであるか、如何に心を立てゝ將來の行爲を善にした所で過去の惡をそれに依つて消すことが出來ないであらう、然らば罪惡の有る者が如何にしたら其罪惡から遁れる事が出來るかといふのが蟹江君の常に提出して居つた疑問であつたので。既に一つの高い理想を持つて居る、其理想に自分は過去に於て既に背いて居るし又將來に於ても背く、到底將來に於て其理想に近づく見込が無い、然らば何の爲に此生活を繼續するのであるか、此の如き生活生命は一日延れば一日丈け理想に遠かる譯である、寧ろ絕滅しなければならぬでは無いか、斯樣な所から自殺を以て一つの苦痛を遁れる方法と考へるやうになつて居つた。今までの忠孝、倫理道德即ち、忠孝とか仁義とかいふことは皆極く不確かなる根據から出て來て居るやうなものと見へる、斯樣なるものが到底大なる勢力を持てるやうには考へられない、然らばどうしたら我々此理想に近づき滿足なる生活を送ることが出來るかといふのが常に其の疑問として居つたところであつて、此疑問を闢くが爲に倫理學哲學等を窮めて行かうといふ考であつた。それは大學に入學する以前に屢々自分等と共に語つたことである。

斯樣にして先づ哲學研究は自己の問題から始つて居つたが其自己の疑問を解釋する爲には、獨り個人の問題のみならず多少一般の人生といふものに眼を向けなければならぬといふ所で、哲學研究になつたのであるが、此哲學研究が次第に大なる抱負と伴ふやうになつて來た。それは一方に於ては研究の方法が非常に廣くなるやうになつて

來たので、即ち此人生の問題を解釋するのにはどうしても此宇宙問題を解釋しなければならない、即ち哲學的原理を發見しなければならない。それにあらゆる科學も一通り知らなければならず、又文學宗敎等も一通り知らなければならないといふので、非常な大きな廣漠たる問題に這入つて來るやうになつた。斯樣に研究の方法が非常な大きになつて來ると共に其研究に依つて目的とするところが大變に大きくなつて來た。即ち始は自己の疑問を解釋すれば宜かつたのであつたが、後には其研究に依つて獨り自己のみならず他人をも救濟しやうといふやうなことになつて來たのである。即ち獨り哲學を研究することを以て滿足せず哲學者となつて他の人に滿足を與へやうといふやうになつて來たものゝやうに思はれる。

然らば其哲學なるものは何であるかといふと是は又他の言葉で名けて人間の學といふやうな名を附けることが出來る、蟹江君は自ら人間學なるものを組織して自他の解脫を謀ることをしたのである。是が哲學を單に「アマチュア」として研究することを以て滿足出來ず專門家となつて研究するやうになつた根本の動機である。斯樣にして一時は哲學文學等に關することを出來る限り廣く修めたいといふやうなことであつたが、後に種々な障碍が起つて其の志を充分に果す事が出來ないやうな事情が起つた。それは即ち身躰の點であつて、即ち大學を卒業する頃より不治の病に罹らんとする傾向があつたので、餘程其の點に對して憂ふるやうになつて來て、多少大きな研究を阻害するやうな傾きもあつたかも知れなかつたと思ふ。が獨り此の如き外部の事情のみならず、其の思想が哲學といふ問題から離れて直接に倫理道德の問題のみに傾かうとした時代が起つて來た。それで始は宇宙問題から倫理を論ずるやうなものであつたが此頃になつてはそれを離れて倫理道德の問題丈けを特別に研究しやうといふやうに傾いて來たのである。斯樣にして大學卒業後暫く京都に在つて眞宗大學に敎鞭を執つたり、或は早稻田の專門學校に講師となつたりして其際重もに哲學史を講義して居つたが、三十三年に高等師範學校に入つて倫理學を講義する頃から倫理學に專ら傾くことになつたのである。所が始は倫理學を組織的に研究して居つたが其中に主として東洋の倫理を一仕事として研究しやうといふやうに傾いて來、其點に於ては非常に材料を

集め徐々に歴史的研究を試みやうとして行つたやうである。それで其第一着手として現はれたものは即ち孔子研究であるのだ。勿論其間に於ても獨り東洋の哲學東洋の倫理を研究することをのみ志して居るのでは無かつたので、出來得るならば矢張り人間學なるものを組織するやうな考は始終あつたのである。だから一日も暇が無いやうに他の方面の研究を怠つたことは無い。けれ共其結果の現はれたのは先づ孔子研究のみであつたといふことは返す〲も殘念な次第である。

だが此の如く研究の方法性質等の變遷したのは其間に於ける君の思想の變遷と平行して居る點があるので、大體君の思想は之を三期に分つことが出來る。第一期の思想は傳說的と申したら宜しい、或は獨斷的と言ふことが出來るであらう。蟹江君は少時から家庭で漢學的孔孟主義の敎育を受け、極めて嚴肅なる生活をして居つたので、普通の日本舊來の思想の傾向を具へて居つたのである、斯様にて高等中學校中頃まではあつたのであるが、其の頃から蟹江君の思想が稍々一變し掛けたやうに覺へる、それは即ち第二期に入つたので即ち所謂懷疑時代である。前に述べた如く高等學校の卒業頃は人生の問題に對して非常に疑惑を懷いて居つた。從來の傳說的道德といふものは少しも信ずるに足るもので無いといふ様なことを深く考へて居つたのみならず往々極端なる意見を持つて居つた。といふのは蟹江君は頗る外面の方に顧慮しない人であるから社會の無意味なる虛飾はどうしても氣に向かなかつたが、一方には文學の研究に傾いて非常に感情的の傾向を帶びて居つたので、それらの點に於ては全く所謂青年の懷疑的時代の特色を悉く具へて居つたのである。唯々併しながら蟹江君は一方にて智が明かであるので、强ちに情の爲に驅られるといふ様な事はなかつた様である。若しさうで無かつたならば我々の如き者と話をして何等の解釋も御互に出來る譯で無く、遂に議論は有耶無耶に終つて居つたのであるから、其結果恐るべきものがあつた筈であるが、幸ひにして蟹江君は一轉變の性質を持つて居つたのである。斯くして一時は非常な懷疑的思想に傾いて居つたのが、次の第三期、批判的時代に移つて來たのである。それは恐らくは大學の哲學科に入學した頃から追々其點が發展して益々其方面に發達して居つた様に思ふ。此批判的時代は即ち前の傳說的と懷疑的との兩方の思想を

改めて其二つを綜合して持つて居るのである、其内容は人々によりて各種の形を爲して現はれたるのであるが、蟠江君のは倫理的と言つて宜からうと思ふ。

一體蟠江君の性格は自力主義であるので、他の力を絶對的に信頼するといふ事は到底有り得ない次第であつた。一時盲目的傳説を信じて居つた時代は稍々他力的宗敎的の形があつたが、併し眞に眼が開いて來ると共に到底其境涯に立返ることは出來ないので、然も宗敎上の安心を得るといふ機會が無く、倫理を以て解脱しやうとして居つた點が多い。自らも實際それを以て多少不滿足を感ずることもあるので、宗敎を味はんことを努めて居つたが、併し恐らくは普通の所謂宗敎にはどうしても這入ることが出來なかつた樣に思ふ。尤も倫理も或意味に於ては一つの宗敎と見ることが出來ないでは無い、其意味に於ては無論蟠江君は宗敎を持たないといふ事は言へない、併し少くとも他力的宗敎は蟠江君の性質と相容れなかつた所である樣に思ふ。即ち其思想が結局益々自力主義に傾いて行たのである。此自力主義の倫理的思想なるものは一面から見れば蟠江君の本來の思想なのであつて、全體其幼時から受けて居つた漢學敎育というふものが頗る倫理的なるものである。同時に其漢學は餘程他力的宗敎と性質の異つたものである。是れが矢張り後まで傳はつて居つたので、それが一たび懷疑の情態を經て更に完全なる形を以て後に現はれたものと見ることが出來るであらうと思ふ。一言にすれば蟠江君の思想は倫理的に歸着したのである。此意味に於て蟠江君は確かに道學先生と言ひ得るので自分自ら之を以て任じて居つたのである。彼「道學先生とは何ぞや」といふ演説があるが之を以て其の邊の消息を明かにすることが出來る。蟠江君の世に現はれて居る方面は恐らく此第三の方面丈けであらうと思ふ、蟠江君を論文に依り其著書に依つて知つて居る人々は唯々此第三の點のみを見て、或人は蟠江君を以て孔孟の道を傳へて居る者と解して居るであらうし、又或人は蟠江君を以を唯々徒らに倫理に拘泥する人である如く思ふかも知れない。が蟠江君の倫理に重きを置き過ぎるといふ風に見へる點は我々と意見の一致しない點で、其點では隨分議論もし又反駁もしない譯では無かつたが、兎に角其方面をのみ多くの人は見て、蟠江君は徒らに偏狹なる倫理道德を説く道學先生であると看做して居るかも知れない。併し此時代に

到着する前に蟹江君が非常な苦悶と戰つたことのあるといふ事は茲に明かにして置くことが必要であらうと思ふ。彼藤村操氏が自殺した時に蟹江君はそれに關する意見を出したが、其時に之を見ると非常に同情に富んで居つて、自分もさう云う風な境遇を經て來たといふことを公言して居るが、其演説をする際には餘程今昔の感があつたであらうと思はれるのである。要するに蟹江君の思想は孔孟主義から出てそれが一たび精錬を經て又新しい意味の孔孟主義に戻つて來たのである。

蟹江君の學者的生活は右の如きものであるが次に性格、人としての生活に付て多少述べて置かうと思ふ。蟹江君の性格を自分は此處で悉く擧げて言ふ事は出來ないし又それを擧げるのは甚だ繁雜で興味の無い事であらうと思ふが、兎に角蟹江君なるものを讀者の眼前に髣髴たらしめるが爲に多少著しき點を擧げて見ると第一に熱心といふことが其性格の上で最人の目を惹き易い點であつたらうと思ふ。蟹江君は一事に意を專らにすれば殆ど他を忘れる事が出來る、此點は殊に其學術研究の方に顯はれて居つた。夫故に一たび或研究をなして居るといふと他人と如何なる談話などをして居る時

にも何時の間にか話を其の處へ持つて行つて其研究の材料を求めることに汲々として居る。其他熱心なる事は往來で議論などをすれば殆ど歸路を忘れて議論するといふやうな有樣であつたし又病中などでも少し快くなると忽ちさう云ふ議論を試みやうとしたことが屢々ある。其研究に向つて居る時には殆ど他の事は顧みないといふことがあるので、我々が往々其の位の熱心を以てしなければ研究することは出來ないかといふ考を屢々起したやうなこともあるのである。近頃自分は久振りで蟹江君の夢を見たがそれは詳しく今覺へて居ないが何か自分が或研究を大分怠つて居つて色々の方面に手を出し過ぎて居るのを非常に蟹江君が咎めて居るやうな夢を見たのである。夢覺めてから自分は大に省みたことがある。斯樣に自分に取つては始終蟹江君は其研究熱心の手本となつたのだ。斯樣に熱心なることが第一の特色である。熱心と伴隨して努力と云ふ事は君の特色なので、病革まつて研究の念を絶たぬ事は實に學者の模範とすべき所と思ふ。君は戯れに病中「講學院中道挫折居士」と戒名をつけたが、やゝ滑稽に過ぎるので、我々相圖つて「講學院勤勇不退居士」としたが、やゝ君の特性を擧げたと

思つて居る。次に正直廉潔といふことも矢張り特色と認むべきものと思ふ。其他美德は種々あるが唯々美德のみ擧げるのは、却つて故人の人格を表はす所以で無いので、稍々反對の方面に屬する事を一つ擧げて見やうと思ふ。それは其頗る主我的であるといふ事に歸するであらうと思ふ。所謂熱心といふのは主我的性質と關聯して居るのであるが、蟹江君は非常に我の强い人間であつた。夫故に自分に守るところがあれば決して屈しない、例へば議論などをしても容易に屈服することは無い。尤も眞理を尊重するの念が深いから、既に自分の議論が過つて居るといふことを會得した場合には割合に公平に他人の說に服從するが、併しそれまでは、力を極めて辯ずる傾きが多い。斯樣に主我的なる爲に自分の主張を立て、精細なる研究をなすことが出來た。併し一方に於ては主我的なる爲に餘り他の如何を顧みないといふやうな弊が往々あつたのである。例へば他から物を依賴しても自己の研究其他に非常な不便を與へる場合があつて、自分の邪魔だとか或は自分の考へたことゝ稍々反對があるといふやうな場合には容易に他の依賴などを引受ける事はしなかつた。それが爲めに自分は非常な親友であつたにも拘らず隨分喧嘩的議論激しき議論にも及んだことなどある。併し人は誰でも多少缺點はあるもので而も此主我的缺點は往々にして或一事業をなす人の常に具へて居る所であるので、自分は徒らに此の點を以て故人を罪するといふやうな意は無論無い、唯々此缺點に依つて多少又性格が顯はされるであらうと思つたのである。且つ斯樣に主我的と云ふ中にも其所謂主我的の性質が所謂利己的即私慾等に伴つて居るのではないので、其點は又嚴に區別せねばならぬ。君の主義は要するに自己の目的、自己の理想といふものを立てゝ少しも他の理想、他の目的等を容さないといふことに歸着して居るのである、此點は非常に公平を以て自ら任じて居るに拘らず多少偏狹に流れて居る點であつた樣に見へる。併しながら此の如く主我的なりと雖も自ら奉ずることは極めて薄く知足といふことを心に懷いて居つたから、其家庭に於ても蟹江君の家庭は極めて圓滿なる生活を送つて居られたのである。

一言にすれば蟹江君は性格に於て意志が非常に强く、智が非常に明かであつた。一時「センチメンタル」に陷いつたが、其智と意との爲に抑壓することが出來て居つた

やうである。それが爲めに蟹江君は非常な不幸は免かれたが又多少主我的に傾き過ぎた點もあるので、漸次克己修養の末、大なる自我を主とするに至るべきであつたが、君の生命が短くして此機會を得なかつたのは我々の深く惜む所である。

尙性格を最よく表はすものは嗜好であるが、次に此點を述べて君の面目を表はしたいと思ふ。一概に自我的意志的といふ事を言へば頗る趣味に乏しい人の如く見へるが蟹江君は決してさうではなかつた。前にも述べた通り蟹江君の嗜好は先づ碁であつたが、それは勉學の妨であるといふので一時全然廢して居たと聞いて居る。其の次に蟹江君の最好んで居つたのは文學美術であつて其文學の中でも西洋の文學を味ひ又日本の古今の文學を讀み研究して居つた。殊に小說を愛讀して一種の批評眼を具へて居つた。其小說の批判などは我々が寄り合つた時の話の題目となつて居つたので、併し蟹江君が如何なる文學を愛讀して居つたかといふ事は急に憶出すことが出來ないが何しろ西洋文學の中の著名なものを仔細に研究する傾きがあつた。日本の小說家では現今著名の人々の作は固より廣く各種に涉つて居つたのである。蟹江君の說を聞くと此の如き嗜好は稍々乏しいやうな感じを懷く人もあるかも知らぬが、併し其平生に於て決してさうではなかつたので、「我邦に於ける過去の理想」「人生の危機」（共に『倫理叢話』中に載つて居る）などといふ演說の中に引かれて居る事柄に付て見ても其邊が分る。即ち其中には紅葉一葉諸氏の小說を引用し、或は源氏物語と淨瑠璃とを比較して居るが、是等を見ても蟹江君の嗜好の一端が分るのである。一時は又美學の研究に意を傾けて居つて『帝國文學』などにも美學の事に關する意見を書いたものがある。尙試みに其嗜好の向ふ所を示すが爲に、沼津へ轉地療養をする際に携へて行つた書物の種類を擧げて見やう。一昨年の暮愈々一年も療養しなければならぬといふ事で沼津へ行くことになつた時に、何の本を持つて行かうといふ事が第一の苦悶になつて居つたのである。其時の事を思ふと病氣療養の際にも書卷を離さないといふ樣な精神は能く現はれて居るだらうと思ふ。それで病中讀み得る書物を一箱程沼津へ持つて行かれたが、其中には二三の哲學史があり、獨逸の文學史があり、英獨語の詩歌小說、獨逸語希臘語の文法書があり、其他若干の哲學書等があり、或は高僧の傳記經史和漢古今の文學

會等があつた。即ち蟹江君は病中は他を研究することは出來ないから文學歴史語學等を研究して行かれて將來の基礎を作らうといふことを考へて居つたのである。病の中にも徒らに日を過さないといふ精神は充分其處に現はれて居つたものと思ふ。

蟹江君は一面に於て非常な嚴肅なところがあるが、一面には非常な諷刺などの才を具へて居つたので、滑稽的諷刺的の文字などをも其間に弄して居つたのである。それは今一々記憶して居らないからそれを擧げる事は出來ないが、一つ君が外形に頓着せぬ所を示して見やう。一昨年の夏頃であつたか、丁酉會員が羽田へ遊びに行つた事があつた。そこで君は散々皮肉な批評など試みたが、夕方歸途當時開設になつた日比谷公園を通過した。其折君は氣候の激變を恐れて「フラチル」の單衣と「シャツ」を大きな旅行鞄に入れて携えて來たが、其側にはレイ〳〵と蟹江義丸と大きな名刺がはつてある。輪の内へ楷書で大小と書いた紋のついた黒木綿の羽織で大きな鞄をぶら下げてハイラカ趣味の公園を傍若無人に歩行く所は、どうしても村夫子然たる風があつたが、君は平氣で行くと某校の制服を着た學生が澤山禮をして行くので、「小遣學が親方に禮をして居る」と皆々大笑した事があつた。

尚終りに蟹江君の詩才を示す一端にもと思つて自分の手元に保存して居る舊作を一二列擧して見やうと思ふ、一つは明治二十七八年頃大學の二年生時代の作で即ち「斷雲」といふので他は時代はハッキリ覺えぬが矢張其頃の俳句である。

斷雲

一

おもふことある身なればや、　秋の初の夕まぐれ、
風の行方になにとなう、　都の空のこひしさよ、

二

みそらに立てる高樓の、　巧みの程もふしのまや、
つれなき風にきえうせて、　はかなき雲の行方哉、

三

今ぞちりけん雲のきれ、　くしくもあなたに打つどひ、

いといかめしき城砦、　　きづき出すも頼母しや、

四

離れつよりつ夕雲の、　　あなたこなたにゆきかへど、
うらみはせじよ心なき、　　風にまかししことなれば、

五

かたみにはなれたゝよへる、　　同じ心の雲のきれ、
空行く風に折々は、　　はかなき心をみたすらん、

俳句

馬子歌にさかへし道か並木松
早稲おくて一枝毎のいねの色
此風情櫻にもなし女郎花
百草はあとなくちりてなくうつら
吐くいきのしばしは見ゆる寒さかな
手にのせて空しくきゆる霰かな
梅の花枝ぶりめづる人やたれ

是が果して蟹江君の詩才を最能く表はして居るかどうかは斷言することが出來ない、或は之を公けにすることは却つて故人を瀆すことになるかも知らぬが、兎に角此の如き間に此の如き作があつたといふ一つの紀念として附加へて蟹江君を憶ふの材料に供しやうと思ふのである。

種々言ふべき點もあるし筆を執つて多少の感慨の辭を述べたいのであるが、何分にも此頃の境遇上寸暇を得ることも出來ないので、憶出したことを一二筆記して貰つたので、何となく解釋的になり、眞の情緒が顯はれず、又種々手紙などを搜出してそれを掲げる等の暇が無いのは非常に遺憾に思ふ事である。（丁酉倫理三十三）

中島氏に與ふる書

拜啓　時下筆硯益御多祥奉慶賀候、扨先日は拙著『時代哲學』に就き御批評を賜はり難有奉謹謝候、御批評中過褒に渉り居候點はひたすら恐縮致すのみに御座候得共、多少小生の眞意を誤解せられ候箇處、或は小生と到底御一致なされ難き點に就ては少々辯解申上置候も、強ち御咎めを蒙り候間敷か、明春初刊には會員惣出の大景氣に付小生も三階連の一員として何か書けとの御嚴命に接し居りながら、目下の事情如何にも熟慮の暇無之（と云ふは畢竟自己の無能を掩ふに外ならざることゝ御推察せられ候べきも）、此手紙にても餘白の埋草になされ候はゞ多少は義務を盡し得る次第、固より名譽の慾などゆめ〳〵起し居らず候へば、何所の隅にても御隨意の所に御掲載の上、誤まれる點は容赦なく御叱責被下度候

先づ、辯せずともよき事には候得共、表裝の「スフィンクス」だけは小生の注文に有之候が、右は畫工の意匠にて大に豫期に外れ居候、小生は希臘の「スフインクス」を書きて幾分か「謎」の意を表したく存居候處、埃及の「スフィンクス」となり、加ふるに「ピラミッド」あり、裏には駱駝あり、と云ふ次第にて、何だか凡て埃及式に相成り、或人は之を評して「時代」とは芝居で言ふ「大時代」などの「時代」の意かなど戯れ候事に御座候、然し貴評の解釋も至極面白く相覺え候、何れは人の造りたるものならざるべき「スフィンクス」が惡さげに「ピラミッド」を睥睨するは、とにかくさ學說の角芽立ち、臆見の我執に誇る現世にも似通へりと申し候べきか、何とも解釋はつくものと思はず微笑致候、但し「スフィンクス」は著者の似顏かなどと云ふそんじよそこらの惡口だけは御免を蒙り度候

第一小生の意見に主觀的價値を御許容被下度候は小生の大なる寛典と感謝する所に御座候、固より右の序文は小生自身の根本的精神に外ならず候へば、結局は主觀的價値を認められ、それ以上の學問が現代社會に拘泥する要なしとの「序文」に對しては大分御異存有之樣子、否一大外道惡魔の言として著しく御意に觸れたる趣恐縮致候、然し之に就ては多少調停の餘地可有之と存居候間少しく鄙見を披陳致置候

値のみを有し居候へば其にて滿足致す次第に御座候、姉崎兄の所謂原的性格とも申すべきか、意志の强固なる人と否とは到底其歸着點に於て異なり來るべく、意志的の人がとかく道學的或は經世的となるに對して薄志弱行の徒はとかく遯世的或は超世的となるは免れ難き所に御座候、貴兄が事々物々に倫理的意味を看出さねばやまぬはもと貴兄の主觀的要求、他の人が或は文藝の獨立を唱へ或は學術の自由を望むも他の人の主觀的要求、所詮は「スフィンクス」と「ピラミッド」との睨合に過ぎずと存候、文藝家に强て軍國の人心を鼓舞する樣なる作品を出せと要求するの無理なる如く、哲學者の研究室から時局學術講談會の材料が生まれなければならぬと云ふも餘り一面のみの議論と存居候、固より小生は文藝學術の應用を厭ふものには無之、而して時々によりて其應用の方面も異なり行き、寧ろ今日の場合にては一部分の人々は成し得る限り其方面に盡すべき義務も有之と信じ居候得共、之が爲に學藝の永久的價値は毫も侵害汚瀆せらるべき者に無之と確信致居候、小生は此意味にて學術の研究者と應用者との職分を區別し、研究者の眞意を發揮致度存居候者にて、序文の意は之に外ならず候、尤も一人にて多少研究者と應用者とを兼ね得ざる事は無之、小生は寧ろ一個の人間としては到底研究のみにては滿足出來ず、勢、應用の方へも手を出したくなるものと考居候、學者が教育者を兼ねることは全く最も近接せる方面に應用を試みたるもの、是れ「時代と哲學」のある所以と存候

是に於て小生の意見はやゝ貴兄の意見と調和するを得る樣に相成候が、小生はまた更に貴兄の意見と一致し得る點を有し居候と存居候、と申すは他事にも無之、本來上述の意見は主觀的要求なりとは申せ、之を單に要求と致置候は小生の最も禁物と致候事にて、曲りなりにも理窟をつけ度存居候、又表面にては其の理窟は存在し居らず候得共根抵には必ず存在致居候まゝ、若し穿鑿を加ふれば必ず發見し得ることを信じ居候、こゝが所謂客觀的基礎にて、此客觀的基礎を求むる點が貴兄と小生との間に大に趣を同うし居候處と存候

然し此に至りて小生は貴兄と此方法論上の同一點あるに關せず、內容上に於て或は意見を異にするの不幸ありやとも存候、或は之を言語上の爭とも看做し得ずやとも存

居候得共、とにかく一應披陳致候
前陳の如く小生は文藝學術が獨立の價値を有すべきことを要求致居候が、是れ實に獨り小生の要求なるのみならず、事實の證明する所に御座候、勸善懲惡とか教育應用とか銘打つたる小説に面白きもの無之、我等は反て不道德の書と評せらるゝものにより多き愉快（云ふ迄もなき事に候が純粹の美感）を感じ候は、畢竟前者が文藝にてありながら文藝以外に直接の目的を立つるに關し、後者が一向かゝる目的を認めざる點に於て反て充分なる力を振ふことを得る故に御座候　斯く言はゞ小生が反道德主義の文字を鼓吹する樣に見えて、そりやこそ變説と詰らるゝかは知らず候得共、小生は固より反道德主義を主義とせる文字には充分なる滿足を感ぜざること十年一日の如く、また最良の文學が反道德主義の文學中に存せざること、文學者が故意に反道德を標榜するの非なることを主張致居候　そは人は到底人に候まゝ、其本心に立反り候はゞ、人生の一要素たる道德に背馳することによつて眞の快樂を得難く、又人生を題目としながら此道德を認めざる文學は到底人生を描寫せる文學として成立する能はざることと存居候、閑話休題文學のみならず、一切の學藝は悉く皆人生を稗益せんとか道德を助長せんとか云ふ事を念頭に置かざる所に發達致候ものにて、例へば史學などにても往時の春秋の筆法を振廻し居候限りは到底眞の歷史は發達する見込なく、倫理學自身もかく云はゞ良心を害しはせぬかなど心配致居候ては根抵の説明などは出來ぬ事と思居候、然し固より學藝が全く道德を汚瀆しても拘はぬと云ふ義には無之、若し事の道德に關係致居候もの有之候はゞ、無論從來の道德意識にも相當の注意を怠らざるべき事は小生の充分認居候事に御座候、而して其結果が遂に道德と背馳せざるべき事は一般に豫期し得る事と存候、たゞ「如此き學藝に何の利益ありや」「何の道德上効果ありや」など論じ候は學問をひたすら經世の方面より評價せんとする支那的思想と存候
かく申候はゞ銳利なる批評は忽ち口を衝きて出づべしと存候、即ち學藝が結局道德と一致するなどとは大なる獨斷に非ずやとの非難に御座候、然し小生の考ふる所によれば是決して獨斷には無之、苟くも知情意が同一意識作用の各方面に過ぎざることを認め人生の各要素相須ちて初めて各要素も發達する者なるの理を認むれば、或要素が

他の要素を侵害する場合は決して完全に發達し得ざることを了承致し得る事と存候、是が即ち貴評に所謂客観的根抵にて遊戯衝動が實用衝動に基づくと云ふ義に可有之と存候、小生は之を「人生の一産物として人生の理想に背反する學藝は存するを得ず」と申し候ものにて、此事は既に序文中にうたひ置候、但し此に「得ず」とか「容さず」とか申候は頗る曖昧にて、「べき」の意か「アル」の意かなど、反問に遭ふことゝ存じ候、小生は何れにても宜しく候、奇怪なる事をとの御批評もあらんかなれど、小生は結局「べき」と「アル」との根本的差別なき事を信じ居候、此事に就ては他日また御高説を伺ふ機可有之候か

以上誠に亂雜且無證據の言のみ多く候が文外の意御推察被下度候

序に申上候は先程申上候支那思想云々はまた舊思想と目したきものにて、此思想が社會に跋扈して新思想を迫害するは御同樣遺憾の至に御座候、此の如くしてミュアヘッド事件起り、義務名譽論起り、最近には國定教科書論起り来り候、新舊兩子に、何れを欠くべしとにはあらず候得共、かく舊分子のみ勢力を得候は望ましからぬ現象と存候

最後に申上候　新刊欄には署名無之候得共、假りに貴評と看做し縷々の言を陳述致候が、是だけは必ずしも獨斷の咎を受けざるべく存候　不宜　（十二月二十一日）

性格と哲學　終

明治三十九年十月十一日印刷
明治三十九年十一月十五日發行

定價金壹圓貳拾錢
郵税拾錢

著者　桑木嚴翼
東京市本郷區千駄木林町一九六

發行者　日高藤兵衛
横濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者　村岡平吉
横濱市山下町八十一番地

印刷所　福音印刷合資會社

複製不許

發行所
東京市本郷區千駄木林町一六九
日高有倫堂
（電話下谷貳五貳八番）

大賣捌

東京市京橋區尾張町
東京神田區表神保町
東京神田區裏神保町
東京日本橋區箔屋町
東京日本橋區吳服町
東京日本橋區住吉町
大坂市發賣元
京都市二條川原町
名古屋市
神戸北長狹通
甲府市柳町壹丁目
水戸泉町
野州足利町二丁目
廣島市鹽屋町
岡山市岡山町
周防國岩國町
山口大市町
高知市種崎町
熊本市新町二丁目
鹿兒島市松山通り仲町
鹿兒島市仲町
筑後國久留米市

警醒社
東京堂
上田屋
前川
北隆館
至誠堂
杉本書店
寶文館
川瀨代助
福音舍
大塚柳正堂
川又銀藏
青木書店
積善館
奧田金昌堂
白銀日新堂
同支店
澤本書店
長崎次郎
永久金光堂
吉田幸兵衛
菊竹書店

靜岡市吳服町
橫濱市吉田町
同松ヶ枝町
盛岡市肴町
前橋市曲輪町
越後國水原
新潟古町
越後長岡
金澤市片町
高岡市守山町
福井市佐桂枝中町
信州長野市大門町
信州松本町
信州諏訪町
仙臺市大町五丁目
陸中一ノ關町
陸奧弘前市土手町
青森市米町
秋田市茶町
北海道札幌區南一條西二丁目

吉見書店
第一有隣堂
弘集堂
佐々木仙助
煥乎堂書店
西村六平
西村支店
覺張次平
宇都宮書店
學海堂書店
品川書店
西澤喜太郎
松榮堂
日進堂
藤崎書店
佐藤喜平
今泉道太郎
同支店
成見清兵衛
富貴堂

30
502

007929-000-3

30-502

性格と哲学

桑木 厳翼/著

M39

AAA-0100

7. 4.19